

EL31

24



00992152

1



0036127000

0036127-000

EL31-24

筋肉労働三十年

安倍貞松・著

親流社 巖松堂書店（発売）

1935

AGF

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年3月2日
付で文化庁長官の裁定を受け使用するもので

EL31

24



00992152

倍貞松著

筋肉勞働三十年

發賣一元

巖松堂書店

進呈

著者

安倍貞松著

筋肉労働三十年

東京
觀
流
社

EL 31

24



目次

一 労働は人の生命……………(一)

 労働とは何か……………(一)

 労働を離れて生命なし……………(二)

 労働は生活の手段にあらず……………(三)

二 労働は苦痛か……………(五)

 労働の本質は愉快……………(五)

 過 勞……………(六)

 單調労働……………(一〇)

 神経性的労働苦……………(一一)

 被僱労働に獨立性の附與……………(一三)

 農園労働に獨立性の附與……………(一六)

三 労働に尊卑なし……………(二一)

目次

992152

労働と物との混同……………(三)

労働と数量の混同……………(三)

労働と人物の混同……………(三)

四 労働差別観の弊害……………(三六)

遊民を造る……………(三六)

物質文化の進歩を阻害す……………(三六)

民族を劣化する……………(三六)

五 命令と服従……………(三七)

三大要素……………(三七)

命令尊服従卑の由来……………(三七)

命令と権力……………(三七)

命令と魅惑術……………(三七)

人を見ず命令を見よ……………(三七)

六 労働及労働者の分類……………(四一)

根本的分類……………(四一)

意識労働の分類……………(四一)

労働者の分類……………(四一)

苦力的労働者……………(四一)

過渡的労働者……………(四一)

正常労働者……………(四一)

七 如何に労働に對すべきか……………(五〇)

對神の心即ち對労働の心……………(五〇)

労働に眞面目なれ……………(五〇)

不平の轉嫁……………(五〇)

自他労働の間に差別を置くな……………(五〇)

八 労働者と自尊心……………(五七)

自尊心……………(五七)

自尊に入る道……………(五七)

妻勞修正道場……………(六〇)

服裝も環境……………(六三)

九 勞働と遊食……………(六五)

 遊食者……………(六五)

 社會は一大勞働組合……………(六六)

 社會はまた一大百貨店……………(六七)

 遊食は勞働正面の敵……………(六七)

 遊食亡國……………(七一)

一〇 筋肉勞働三十年……………(七四)

 被僱勞働時代……………(七五)

 獨立勞働時代……………(七六)

 六時間被僱勞働……………(七八)

一一 勞働時間……………(八三)

 勞働時間算出の標準……………(八五)

八時間勞働は理想か……………(八五)

六時間勞働……………(八六)

疲勞堆積……………(八九)

年齢、體質と勞働時間……………(九三)

一二 時休、週休、月休、年休……………(九四)

 過勞讚美の誤謬……………(九四)

 時休……………(九五)

 週休……………(九六)

 月休……………(九七)

 年休……………(九八)

 除外例……………(一〇一)

一三 機械は勞働の主體……………(一〇三)

 文明人と勞働時間……………(一〇三)

 勞働の機械化……………(一〇四)

一四 テクノクラシー……………(104)

夢物語ではない……………(108)

二時間労働は過少……………(109)

無爲ほど辛いものはない……………(111)

一五 罷業……………(113)

罷業の意義……………(113)

罷業の推移……………(114)

小供に剃刀……………(116)

一六 労働教育……………(110)

労働教育とは何か……………(110)

労働者の眼に見學……………(114)

労働力と體力……………(115)

一七 結 論……………(118)

——(目次終)——

筋肉労働三十年

安 倍 貞 松

一 労働は人の生命

労働とは何か

労働とは、悪事以外の一切の思想、行動を云ふ。されば人にして労働者でないものはなく、老若男女皆生れ乍らの労働者なのである。

赤ん坊は睡眠以外、寸時も凝としてない。生長せんが爲の本能的労働である。又餘生幾何もなささうな老人でも、常に何かしら働きつつあるものだ。少くも其意志を持つてゐるものだ。隠居と稱する者の中に、稀には本當の遊食者もあらうが、之は本人の意志と云ふよりも、寧ろ周囲が働かさせないのである。

一 労働は人の生命

一

労働と云へば直ぐ苦役酷働を聯想するが、それは間違である。労働とは「はたらき」の意で、少しも過勞、過激、苦痛等を意味するものでない。とは云へ労働の二字は、その字義から云つたら、日本語の「はたらき」を完全に表はしてはゐないであらう。勞の字には過度、過激、苦痛などの意味を含んでゐるからだ。だが本書は便宜上、世間の言習はしに従つて「はたらき」を労働として置くが、併し異語ではあるが同義である。

労働を離れて生命なし

云ふまでもなく人間は、労働を離れては生存することも、進歩することも出来ない。されば、労働は人の生命であり、進歩の原動力なりと云ふも通言ではあるまい。

人の一生は労働に終始する。生れた時が労働の初めであり、労働の終る時が死ぬ時である。實に生命あつての労働、労働あつての生命である。

働の字は傑作だ。人偏に動とあり、動はまた、力の重なりである。人の動く所に働が生じ、力の重なる所に事の成就するの意であらう。全くその通りで、動なき所に働は生ぜず、また生

命もない。

動は生、行動、流轉、進歩、飛躍などを意味し、動の反対は死、無爲、停滞、退歩、墮落などを意味する。故に労働を嫌悪、廻避するものありとせば、それは生を否定するものだと言はれても致方ない。

一時的ではあるが、外面に現はれぬ労働がある。沈思黙考がそれだ。この種の労働は、一寸眺めては不動靜止の形だが、實際は然らずで、不動靜止は肉體のみで、頭腦は旺んに活動してゐるのである。純粹無雜の頭腦労働である。

頭腦を動かすことに依つて精神労働が生れ、手足を動かすことに依つて筋肉労働が生れる。心身いづれの労働も、動きのない所には生じない。動きのない境地は死であり、虚無である。

労働は生活の手段にあらず

労働を生活の手段と考へる人が多い。この解釋に従へば、生活が出来れば働く必要なしといふ結論になるが、正しい解釋でない。なるほど働かなければ食へない、食はなければ餓死する。こ

の點から云へば労働は、全く生活せんがための手段らしい。併し金や米の有無多少に拘らず人間は、無働生活——絶對有閑生活に耐えられるものでない。衣食餘りあつても無働生活を繼續すれば、必ず不幸を招くものである。生即ち動、動即ち生で、動物である限り動かす、働かすにゐることは、絶對不可能であるからだ。

働かずに遊んでゐたい、と云ふ聲は屢々聞くが、しかしそれは、過度より來る労働苦に對する労働者の反動感であり、労働苦を知つて無働無爲苦の、より以上苦痛であることを知らない者の癡言である。人間の本質は活動にある。衣食に不自由なくも、一切活動を封じられては、人間を封じられたも同様である。人間あつての衣食だ、人間なくして衣食も何もあつたものでない。有産階級中には、ぶら／＼遊び暮しつゝあるかに見えるものもある。これは皮相の觀察であらう。彼等が遊んで許りゐるやうに見えるのは、まるで働かないのでなく、働きの量の少いか、或はその働きの人目につかないかであらう。例へば室を閉ぢて書道に親しむとか、詠曲を吟るとか、又或は盆栽弄り等は世間の耳目を離れた仕事である。もちろん此等の仕事は絶對必要とは云へまい。併し、これなくしては、人生は餘りに無味乾燥とならう。だから、何もしない本當の閑

人と云ふものは、先づないと云つてよい。又眞の閑人にならうとしても、人間の本性は之を許さない。閑人とは、労働量の少い人と云ふことである。

労働を離れて人なし、生命なし。所詮生命と労働は、二にして一である。少くもさう極める所に進歩、優化あり、意義ある人生があるのである。

二 労働は苦痛か

労働の本質は愉快

労働と云へば一般に、或程度の苦痛が聯想される所から無意識に、苦痛そのものを労働の本質、本態と心得る人も少くないのであるが、果して左様であらうか。

労働を離れて生活なしとするも、労働即ち苦痛なりでは何人も、なるべく働くまいとするに至るは避け難い。世を擧げて、さういふ風になつては、よしんば生活に心配なしとするも、社會の進歩は望めない。少くも進歩は遅れる。隋風の旺んなる國ほど進まず、榮えない。

労働と苦痛とは、全然別箇のものである、丁度身體と疾病とが別物であるやうに。體が如何に健全でも、無理をすれば病氣がやつて来る。人は病の器なりといふは、器ではないが、無理をするから器となり易いといふことだ。同様に労働の本質は愉快性のものだが、無理な働きをやるから、苦痛がやつて来るのである。苦痛は労働の本質ではない。無理な労働に随生する鬱病氣に過ぎない。

然らば労働的無理とは、一體どんなことかと云へば、働き過ぎる事、單調過ぎる事と、そして神経性的労働苦とであらう。

過 勞

過勞とは、働き過ぎることだ。換言すれば労働力の限度を超へて働くことだ。長時間の労働、時間短くも激しく働くなどがそれである。

何事も過度はよくない。食事は絶対必要であり、また、最も楽しいものである。けれども過食暴飲すれば、樂み變じて苦みとなり、必要も却つて害毒となるやうに、労働も度を過ぎては、愉快

が苦痛と變じ、生きんがための労働も、死なながための労働となる。人間にも動物にも激過勞するものに、長命するもの少いのは、この爲である。

自己の労働力に應じ、適當に労働すれば、何ともいへない愉快味を覺えるものだ。即ち労働の本質は愉快である。労働が愉快であれば、労働嫌惡の念の起らう筈なく、何人も樂んで働くやうになる。従つて能率増進し、労働争議も大半なくなる筈だ。

そこで問題は、苦痛を伴はないやうな労働で、進歩的生活が營み得られるか、何うか？であらうと思ふが、得られない所か現に人類は、その方向に大なる進歩を見せてゐるではないか。數十年前と今日とを比較して御覽、如何に労働時間が短縮され、労働苦が減少したかを、そしてまた、その割に如何に生産率の激増せしかを。實に隔世の感あるではないか。部分的にはあるが、正常労働——苦痛なき労働時代に、もう一息と云ふ所まで來てゐる所さへ、今は珍らしくない。苦い程働かなければ食へないと云ふのは、昔日のことである。意識の有無は兎に角、人間は無痛労働——正常労働時代を目指して進みつつあるのだ。所謂黄金時代とは、この無痛労働時代を指したものであらう。

過勞は苦痛を招く。しかし、過勞しなければ食へない、とすれば、どうすれば過勞を避け、もしくは緩和することが出来るかと云へば、そこに二つの方法があるやうに思ふ。無駄なく働くこと、助働機械の發明とその使用である。

大抵の人は、無駄なく働いてゐる積りであらう。所が、無駄のない働きをしてる人は案外少いのである。無駄なく働かうとしても周囲の事情が、之を許さないこともある。だから、過勞しなければ追附かなくなるのである。

労働巧者のものは、勞苦せずに二重、三重の働きをする。母親が裁縫し乍ら小供に本を教へるなどが、二重労働であり、煮焚し乍ら裁縫し、讀書を授けるなどは三重労働である。序でを利用しての二重、三重労働であるから苦しいことはない。假りに書物でもそれは極めて少い。注意すれば誰にも、出来ることである。

然るに二重はおろか、半働しか出来ない人もある。斯ういふ半労働者は労働意識の發達してない所程多い。例へば商店或は郵便局などに行く。先客が後に廻はされるのが珍しくない。客としてこれ程迷惑なことはない。來客の後先に注意するは、最も大切な勞務の一である。にも

拘らず、彼等は無頓着だ、手當り次第だ。爲に客に不快を與へ、不秩序、混亂を來たし、果ては業務の不振を呼ぶことになる。客殺到する時は致方なしと云ふが、客の少いときでも先後が顛倒される。従業員の如何に労働すべきかを知らないのだ。一つの仕事が満足に出来ない。これなどは半働きといふのである。

皆んなが無駄なく働くやうになれば、これだけでも從來費やした時間の一分乃至二三割方、短縮することは何んでもないことだ。併し誤解してはならない。無駄のない労働とは、死にも狂ひに働くことでない。急かす、懶けず、無駄なく働くこと、唯それだけである。氣遣ひ働きは盲働であつて、眞の労働ではない。

併し、何といつても労働苦を除く、最大最良の方法は、助働機械の發明、使用である。機械の發達しない所に、正常労働は到底望めず、長く激しく苦しく働かねばならぬことになる。苦力的労働のあるは、助働機械の未發達なる證左である。考へるまでもなく、肩や天秤棒或は手車で荷物を運ぶと、自動車で之をなすとは、労働の難易、能率の高低云ふだけ野暮だ。前者は苦痛そのものであり、後者は苦痛知らずである。

天は人に發明力を與へた。苦しい時引き出して利用せよといふのだ。遠慮なく活用すべきだ。種族の優劣、存亡は、發明力の多少に依つてきまる。劣等種族ほど、この種能力に乏しい、若しくは利用するを知らない。

單調労働

仕事は樂でも、あまり單調だと、厭きが来るものだ。倦厭感もまた一種の苦痛である。最も單調労働に平氣な人もある。これは生來頭の單純な人か、または單調労働に慣らされた人だ。

労働の單調苦は、心機を轉換することに依つて、除去若しくは著しく、緩和することが出来る。そこに研究を進めたら、何とかよい工風がありさうなものだ。労働の間合に、慰安、修養を與ふるなど面白い。こんなことは、大工場などでは、既にやつてゐるだらう。何れにしても、單調より来る労働苦は、言ふ程の重大問題でない。この種の労働苦は、堪へ忍んでも、さして害なく、あつても輕微だ。況んや今後益々労働時間が短くなるものとするれば、之れだけでも單調苦は、殆んど解消するであらう。

神經性的労働苦

仕事は左程でなくも、その割合以上に苦痛、嫌惡を感じることもある。私は、之を神經性的労働苦と名づける。

神經性的労働苦は、被傭労働、從屬労働に限られてるやうだ。獨立労働の場合にも、この種の労働苦のないでもないが、しかしそれは、本人自身の處理すべきで、他人の干渉すべき性質のものでない。從屬労働とは、奴僕労働のことだ。今は殆んど存在しない。

何故被傭労働に限りて、神經性的労働苦が伴ひ易いか。と云へば、その一は、仕事に感興の少いことだ。自分の仕事ならば、心配もあるが希望もあつて、そこに限りなき感興涌き、勞苦を勞苦と感ぜずに働けるものだが、被傭労働は、賃銀引換に勞力を賣るだけで興味少く、或は無く、被傭労働の大部分は、已むを得ず働く労働である。かかる譯で被傭労働は、就業前から既に、神經性的労働苦感が働かかけてゐるのである。尤も神經性的労働苦と云つても、仕事によつては、殆んど感じないものもある。殊に優越感、名譽、榮爵の伴ふ官界労働には、神經性的苦痛は皆無と云ひたい位である。

その二は、これも仕事次第、人次第だが、大抵の場合被備労働は、何となく馬鹿／＼しい感じのすることだ。殊に教育あるもの程、この感じが深くなるらしい。適材適所でないからであらう。馬鹿／＼しいと云ふ感情は、肉體的に影響は少いが、精神的には相當の打撃で、これが鬱積すれば、怖るべき爆弾となる。露國の共產革命にはこんな意味も随に含まれてゐる。

その三は、氣兼氣疲といふ奴だ。神經性的労働者は、多く此所から發生するやうだ。

被備労働に監視は附物だ。監視は、労働者の不正を未然に防ぐのみでなく、場内の秩序維持、労働者の保護乃至相談等に絶対必要である。にしても、爲に労働者に對して絶えず拘束苦、緊張苦、重壓苦を與へずにかない。正常なる熟練労働者でさへも、この苦痛より脱しられないのである。かくて労働者に氣兼生じ氣疲れとなり、延ひて労働嫌厭感が醸されるのである。これは備ふものの爲にも、備はれるものの爲にもならない。何とか其所に除去乃至緩和の方法がないものであらうか。

被備労働の存する限り、神經性的労働苦感の除去は、むづかしいと思ふが、これを緩和する方法はある。その方法として一般には、労働時間の短縮、高賃給附が連想される。随に有効手段で

ある。併し、より以上有効なるは被備労働に、出来るだけ多く独立性を附與することだ。

被備労働に獨立性の附與

被備労働に獨立性を附與するとは、被備労働を能ふ限り獨立労働化すること、もう少し詳しく云へば、出来るだけ被備労働を、全部又は部分的に、或は其行程の一部を獨立労働化、即ち自分の仕事とほぼ同様の氣持で、働けるやうにすることである。被備労働も此所まで来ると、労働者にとりては、殆んど獨立労働同様の感興涌出し、馬鹿／＼しい感も、氣兼氣苦勞もなく、あつても極めて微少、従つて監視より来る重壓苦、拘束苦、緊張苦と云つた不動の金縛り見たいな苦痛なく、あつても少く、伸び／＼した氣持ちで働ける計りでなく、自分の仕事として心魂を打込むことになるから、自然雇傭者の利益も増大する。かくて所謂勞資共榮の言葉が、初て事實化するのである。

然らば、どうすれば被備労働に、獨立労働性を附與し得るかと云へば、出来るだけ廣範圍に亘りて、被備労働を、請負労働制、出來高労働制、或は、請負出來高労働制化することである。

請負労働制とは、仕事の全部或は一部を、請負制に改めることである。例へば、廣い意味に於て大工の建築請負は、被傭労働に屬すると思ふが、仕事の前後を通じて、殆んど獨立性的労働である。だから作業に興味あり、氣兼、氣疲なく、朗らかに働ける。といつて雇傭主にも不利はない。いづれにも好都合である。

出來高労働とは、出來高に應じて賃銀を支拂ふことだ。例へば一疋幾らで摘桑をするなどがそれだ。

この労働制も亦請負同様、雇傭者側には監視等の手数の省ける利益があり、被傭者は氣兼氣疲なく、熱心に朗らかに働ける。のみならず労働者は、出來高次第と云ふ慾望に釣られて、努力するので能率上り、短時間に多大の金が得られる。といつて、雇傭主の損失とはならない。日給制で同量の桑葉を得んには、より以上の賃銀を拂はねばならず、又急場の間に合はない懼れがある。なぜなら日給労働は、~~急に~~急に急いで働く性質のものでないからだ。

請負出來高労働とは、讀んで字面通り請負、出來高、此の二制を打つて一丸とした労働のことである。

とである。

被傭労働を擧げて之れを請負制、或は出來高制乃至、請負出來高制化することは出來ないとしても、その大部分に應用出來ることは、何れの點より考察しても可能である。出來ないと云ふのは、出來ないのでなく、出來かさないのである。現に米國などで、この傾向の頃に顯著となりつつあるは、その何よりの證據である。

被傭労働廢すべしとの説がある。それには共産的労働を採用する外あるまいが、併しその能不能が疑問なる上、假りに可能なりとしても、その利害得失がはつきりしない。人には天賦の私宥慾がある。必要あつての私宥慾であれば、過度は排すべきも適度の私宥慾は、之を認めねばなるまい。又認めまいとしても、得べからずである。私宥慾を制節するはよいが、封するはよくない。封するは活動を阻止するにひとしく、活動なき人間は、生きた死屍も同様である。この意味で、共産的労働は望ましくない。又行はれもしないだらう。併し、貧富の懸隔を縮めることは望ましい、直接間接労働苦を緩和するからだ。それには均産的労働が面白いであらう。均産的労働とは、私宥慾と被傭労働を認めつつ、大に労働苦を緩和すると思はれるからである。そして均産的労働

は、被傭労働に獨立労働性を添加することに依つて、初て見ることが出来るのである。いづれにせよ、苦痛は労働の本質でない。労働者は、過勞或は労働制の缺陷より来る懲罰作用なのである。

何事にも弊害は伴ふものだ。請負、出來高労働も此原則より免れない。例へば仕事の種類と労働者次第で、ともすれば仕事の粗雑に流れ易いことと、出來高制に附物の、目前の利益に眩惑して労働者が過勞に陥り易いことなどである。併し此等の問題は、労働者の向上によつて、おのづから解消する。それまでは面倒でも、保護的監視の紐を緩める譯に行かない。

農園労働に獨立性の附與

米國で、十數年來急に、目立つて賞與附労働、出來高、請負制労働が流行り出した。

賞與附労働とは、或限度以上の能率を挙げた個人又は團體に對して、定額賃銀以外、その能率に應じて、賞與金を與へると云ふのである。これは好餌を以つて人を釣るの制度で、労働者にとりては寧ろ耻づべきことだが、といつて、餌と知り乍らも、眼前に現金のぶら下つてゐるのは、

貧乏人として悪い心地のものでない。であるから、そこが資本家の突込み所なのである。

單なる日給制は、いづれかと云へば、労働者が働かないのではなく、働けないやうに出來てる制度である。好餌人を釣るの労働制が生れ來たる所以だ。

しかし、賞與附労働制には、永久性はない、請負或は出來高労働制への段階であらう。賞與労働制が一變すれば、必ず出來高或は請負制となるものと思ふ。本人等に其意志なしとするも、大勢の赴く所、さうならざるを得ないのである。

どういふ理由で、斯ういふ機運になつて來たのかと云へば、一言でいへば時勢であるが、しかし、そこに、その機運を促進せしめた動機がなくてはならぬ。労働者の覺醒がそれであり、罷業の頻發がそれであり、階級闘争の熾烈化もそれであらうが、在米日本人労働者が、あの廣大なる加州農園労働の大部分を、出來高制労働、請負制労働化し、爲に加州の農業が長足の進歩を見たことも、慥に動機の一でなければならぬ。

在米日本人出稼人は、本國の同胞から一時、棄民と嘲笑されたものだが、棄民どころか大和民族中で、最良なる分子であつた。なぜなら、當時米國出稼と云へば、鬼の國へでも行く心地した

もので、従つて渡米といへば、郷村でも一辭あるものであつた。それに、その指導者は、まだ封建思想の抜ききれない悲歌慷慨肌の落伍書生であつた。支那人やメキシコ人の出稼人とは、全然その趣を異にしてゐた。米國の小學校で、日本の學童——所謂第二世の成績が、ラテンヤスラヴを壓して、ノーテック系兒童と比肩するは、偶然に蛇が龍を生んだのでなく、親が龍種であつたからだ。

斯ういふ種類の在米日本人労働者である。人種的優越感強く、東洋人を芥の如くに見る白人雇主や監視人の下に、しかも日給制で、窮屈を忍びつつ働ける筈がない。加ふるに一刻も早く金を溜め歸國しようとは、當時の日本人出稼人通有の心理であつた。この堪へ難い不快を除く方法としては、出來高及び請負労働制による外なかつた。そこで日本人は、申合はしたかのやうに、加州の到所で、仕事の出來高、請負労働化に努めたものだ。最初は雇主側のみでなく、白人労働者までが賛成しなかつた。それは、出來高労働だと、栗鼠の如き敏捷さが必要だが、大男で鈍重な白人労働者に、それが甚だ不得手であり、且つ出來高制は賃銀上、寧ろ雇主を利するも労働者に損だ、といふ觀察からであつた。又雇主側としては、當時出來高、請負制の利害得失が、

はつきり分らず、仕事が粗略になりはしないかの懸念もあり、かた／＼躊躇したものであつた。しかし結果は、労働者にも雇主にも好良であつた。雇主としては例へば、從來日給制だと、百弗支拂つた仕事が、七八十弗でその上、迅速に立派に済むことになつたからだ。この點からいへば、賃銀上被傭労働者には、出來高、請負制は損のやうだが、然し勞力不足の米國だ。仕事はどこにもある。重壓苦、拘束苦の付き纏ふ日給制に甘んずるよりも、出來高、請負制で、それからそれへと働き廻る方が、氣樂で所得の多いばかりでなく、心機轉換の妙味もあり、結局精神上物質上得る所多いのであつた。日給制だと、一ケ年せいぜい三四百弗残れば上等だが、出來高、請負制になると、一九一八年頃は樂に六七百弗より、うまく廻ると一千餘弗、當時の爲替で二千圓餘を残したものだ。ルンペンとしては大した收穫でないか。これと云ふも、出來高、請負制であつたからだ。斯くして在米日本人労働者は、雇主を利し、自分を利しつつ加州農業労働の大部分を、獨立労働性化したのである。

米國は産業も盛んだが、労働争議も亦盛んだ。賃銀は騰る一方、労働時間は縮む一方である。これでは、やりきれないと資本家は喚く。獨り米國ばかりでなく、世界を擧げて近來殊に、労働

争議の多いのは何故であらうか。それは時代後れの純被傭労働制の存在に歸せねばならぬ。だが資本家はここに氣付かなかつた。思想悪化とか労働者横暴とか、唯わい／＼騒ぐのみであつた其の矢先、加州農業労働の出來高、請負労働化が、驚異的成績を以つて、眼前に展開されたのだから、兎角日本人のよい事に眼を閉ぢたがる米人も、之を是認せん譯に行かない。是れを認識する以上應用へと行くが當然である。さうでないかも知れないが、日本人が、加州農園被傭労働に獨立労働性を附與せし時、東部の工業地帯に出來高制、請負制、賞與附傭労働制が急に流行り出したのであるから、さう推定したくなるのである。

何れにせよ、現制のままなる被傭労働は永續せぬであらう。強いて永續した所で、害多くして利は少いであらう。現状のままなる被傭労働は、労働争議の孵化器も同様だ。労働方法も時と共に推移せねばならぬ。被傭労働を存置しようとするなら、これに獨立労働性を附與せねばならぬ。かくして初めて、労働苦を緩和乃至除去し得るであらう。

決されるよう念願してやみませ
ん。(東京・KSS生・無職)

職業に上下があるか

▽この三月卒業する高校生が私
に次のようなことを訴えた。すな
わち、自分も両親も東奔西走した
がなかなか思わしい就職口が見つ
からない。それで就職の世話を学
校に依頼した。ところが受持の教
師と就職係の教師が口をそろえて
「お前の家の職業は肥料くみ取り
で、親の職業がよくないから学校
では就職の世話はできない」と放
言したそうである。

▽本人の成績はクラスの上
で、その他の点をみても就職あっ
せんを拒否されるような条件は何
もない。いまだにこんな前近代的
な古い職の持主が、しかも教師に
いるとはまことにあきれはて、憤

りさを感じる。職業に貴せん(賤)
の差別をつけ、職業のいかんによ
つて教養子の就職あっせんを拒否
するような教師には教師の資格は
ないといわねばならぬ。

▽こんな教師がいるからこそ勞
働をきらい、労働者を軽視するよ
うになる。そして卑劣な利己主義
者が形成されると思う。私は声を
大にして叫びたい。職業に貴せん
の別なく、人間の眞の価値は職業
によつてきまるものではない。あ
る職業がいやしいと思う人こそい
やしいと。(新潟・一父兄)

卑、上下の差はない。あると思ふは幻想で、労働
が、しかし、さう云ふ人達——社會主義者たると
は、口で肯定して腹で否定してゐるやうに思はれ
るな失態を絶えず暴露してゐるからである。何故に
ハの間に於てすら、かくも労働差別觀の拭ひ去る事
の原因があると思ふ。

。例へば肥料は不淨であり、繪畫は綺麗である所

争議の多いのは何故であらうか。それは時代後れの純被傭労働制の存在に歸せねばならぬ。だが資本家はここに氣付かなかつた。思想悪化とか労働者横暴とか、唯わい／＼騒ぐのみであつた其の矢先、加州農業労働の出來高、請負労働化が、驚異的成績を以つて、眼前に展開されたのだから、兎角日本人のよい事に眼を閉ぢたがる米人も、之を是認せん譯に行かない。是れを認識する以上應用へと行くが當然である。さうでないかも知れないが、日本人が、加州農園被傭労働に獨立労働性を附與せし時、東部の工業地帯に出來高制、請負制、賞與附傭労働制が急に流行り出したのであるから、さう推定したくなるのである。

何れにせよ、現制のままなる被傭労働は永續せぬであらう。強いて存続した所で、害多くして利は少いであらう。現状のままなる被傭労働は、労働争議の孵化器も同様だ。労働方法も時と共に推移せねばならぬ。被傭労働を存置しようとするなら、これに獨立労働性を附與せねばならぬ。かくして初めて、労働苦を緩和乃至除去し得るであらう。

三 労働に尊卑なし

人に賢愚、上下のあるは事實だが、労働に尊卑、上下の差はない。あると思ふは幻想で、労働は一様に平等であり、神聖である。

労働は神聖なりとは、よく人の口にする所だが、しかし、さう云ふ人達——社會主義者たると學者たるとを問はず——の心底を割つて見れば、口で肯定して腹で否定してゐるやうに思はれる。問ふに落ちず語るに落ちる。といつたやうな失態を絶えず暴露してゐるからである。何故に平等、神聖である筈の労働が、ものの分つた人の間に於てすら、かくも労働差別觀の拭ひ去る事の出來ぬものであらうか。私はそこに、三つの原因があると思ふ。

労働と物との混同

その一は、労働と物とを混同することである。例へば肥料は不淨であり、繪畫は綺麗である所

から何人も、肥料を扱ふ労働は下品で、畫を描く労働は何となく、上品であるやうに感ぜられる。人に醜美感のある限り、これは當然でもあらう。しかし、肥料や繪畫は物であつて労働ではない。その肥料を施したり、畫を描いたりする行爲が労働なのである。物と働きとは全然違ふ。物が汚いからとて、働きまで汚くなる道理はない。然るに多くの人は無意識に、労働と物とを混同、同視して覺らないのである。

二宮尊徳翁は、人皆其業を貴ぶべし、家老が代々官祿を以て勤仕するも、豆腐屋が豆挽くも同じ事なり。然るに豆腐屋は耻づかしと思ひ、家老は榮なりとするは誤りなりといつた。全くその通りだ。金剛石は泥土の中にあるも、錦紗に包まるるも、實價そのものに等差はない。労働また然りて洋服労働たると、股引労働たると問はず、労働そのものは一樣に平等であり純潔である、

労働と數量の混同

第二の原因は、労働と數量の混同である。つまり數量の多少によつて、労働に上下尊卑の差を附けることだ。例へば如何程必要なものでも、多くあるもの程、珍重味が薄れ行き、延いては平

凡視、輕蔑視甚だしきは、厄介視されさへする。反對に數量が少くなればなる程、珍重味加はり、遂に異常視、尊重視される傾向となるものである。

概言すれば筋肉労働は、何人にも可能であるが、精神労働は何人にも可能と云ひない。また筋肉労働は多くの人を要するが、精神労働は少數の人で事足りる。かういふ所から筋肉労働は、人をして珍重感を起さしめない、従つて凡視され、輕視され易くなるが、反對に精神労働は、何人にも可能でないと云ふ所から、珍重感を強化し、適當に尊重されるやうになるのである。

一粒の米も、人は之を尊重する。米には限りあるからだ。空氣は絶対必要だ。しかし人はそれ程、ありがた味を感じない。空氣は無限無盡であるからだ。それと同じやうに筋肉労働は、廣汎豊富に存在する。文明國にも未開國にも人間の住む所、どこにも存在する。所が精神労働は、さうは行かぬ。文明人から見ると野蠻人の間に、精神労働があるか何うか疑はしいくらいだ。あるにはあるが、極めて少いのである。斯ういふ所から筋肉労働が輕視され、精神労働の尊重される傾きとなつたのである。

かかる傾向の生じ來るは、已むを得ないことかも知れないが、それにしても餘りに大なる錯覺

である。吾々はこの謬見に惑はされてはならぬ。

労働と人物の混同

原因の第三は、労働と人物とを混同することである。それは何ういふことかといふに、妙なもので人物の尊卑、賢愚、強弱が、その従事する所の労働の上に反映して、恰も労働に尊卑上下の差別あるが如き外観を興へるものである。それを多くの人は、直に労働の實態であるかに誤信するに至るのである。

積

人の身體よりは、絶へずその人物の高下に相應した、眼に見えない氣氣が放射する。即ち高級なる人物には、後光とも云ふべきものが常に放射し、下級の人物よりは、それ相應の氣氣が發散してゐる。でないとしても、さう感ぜざるを得ないのである。而して人の放射する後光なり氣氣なりが、煙幕の如く、その従事する所の労働を包被する。故に同じ労働ではあるが、従事する人物の如何に依つて、労働に上下貴賤の別あるが如くに感じられて來るものである。が然し、決して労働に上下貴賤の差別はないのである。あるかに見えるのは、人の放射する氣氣の惡戯である。

積

る。

謬に坊主が憎けりや袈裟まで憎いといふが、袈裟その物に憎しみのある譯なく、惡徳坊主から發散する、その卑しい氣氣が着衣に反映する所から、袈裟までも何となく憎らしくなるのである。又權禪も美人の肌に着けば、綿繻化するものである。これは美人の麗質の反映作用が、ポロを包被するからである。

破れ衣も高士が着れば、神々しく見え、如何なる美服も、醜婦に纏はれては、何となく汚らしくなる。労働の表面も亦同じで、労働者の放射する氣氣次第、貴賤上下いろ／＼の外観を顯はすものだ。しかし、労働の本質は何時如何なる所でも、平等であり神聖である。

かくの如く労働は物又は數量或は人物と混淆さるる事によつて、本來平等なるべき労働に、貴賤上下の差別あるが如くなつたのである。といつて、之を放置するには、問題あまりに重大である。平等なるを不平等とするは、甚だしい不合理である。不合理を合理として押通す所に、禍害の生ずるは免れない。

古來精神労働は知識者によつて、筋肉労働は平凡者によつてなされて來た。これは何人の規定

したものでなく、適材適所といふ自然の配置だ。本質的に、労働に上下貴賤の別あつてのことは、断じてないのである。

四 労働差別観の弊害

遊民を造る

労働に、上下尊卑の差別を設けるより来る弊害の一つは、遊民を造ることだ。上にあつては之を高等遊民或は洋服ゴロと稱し、下にあつては賭博、暴力、詐欺によつて遊食しようとする連中をいふのである。

生來の懶け者は問題外として、働けば働けるものが、仕事のあるに拘らず、遊んで食つてゐるものが絶えない。何故であらうか。原因はいろいろあるが、労働に尊卑の差別を置くことが、有力な原因の一つでなければならぬ。

高等遊民は、所謂下級労働に就くを耻辱と感じ、所謂高級労働でなければ飯の食へる限りは、

どうあつても働くまいとする。これでは高等遊民が生ぜざるを得ないのである。上の好む所下尤も甚だしい。下層階級にあつて、腕つぶしの強いものや理屈の一つもいへるものは、これに倣らぬ或は感化されて、筋肉労働を賤業として、これに就くを潔しとしなくなる。かくして下層階級間に遊民の發生を促進することになるのである。世界どこでも、労働に上下の差別を置く國程、遊民の多いといふことは、此間の消息を語つて餘りあるものだ。

適材適所は、自然の配置であり、適材が適所を得れば、容易に離れまいとするも亦人情である。適所に就くは自分のためであり、また社會のためでもある。所で問題は、彼等の子孫だ。適材の子孫は、必ずしも親に肖ると限らない。不肖でないまでも長所が別かも知れない。親に肖たものは、親の業務、地位を其まま繼承して差支ないが、不肖の子は何うする。繼承しようにも其材能がない、といつて、下層階級に落ちたくない。そこで遺産のあるものは、其儘遊食を續け、遺産の少ないものは、不正を働いても、所屬階級に嚙り付かうとする。かくて高等遊民が造出される。

人には名譽心がある。既に労働に上下尊卑の差ありとすれば、有能者はもち論、無能者まで

が、所謂下級労働に入るを耻とし、争ふて高級労働へと志すであらう。労働に差別の置かれる以上、これは至極最もなことだ。所が生憎にも、高級労働は何人にも可能でなく、且所要員も至つて少い。従つて求めて得ざる失業者の生ずるは免れない。といつて彼等は、下級労働——小商賣、小百姓、日傭労働等に就かうとしない。彼等の論法に於て、就けば耻となるからである。小人閑居不善をなす。求めて職を得ず、さりとて筋肉労働は、紳士の耻辱であると、といつてゐては食へても僅に露命を繼ぐだけだ。勢ひ不平とならざるを得ない。そこで不善をたくむことになり、他人の缺陷を探がしたり、柄にもない大義名分を唱へたり、分りもせぬ新思想を鼓吹したりして、平地に波瀾を起し、どさくさ紛れに何か利得しようとする。奸雄あり、此等遊食不平の徒を煽動せんか、怖るべき大事が惹起されるのである。

物質文化の進歩を阻害す

小學問、小才智を持つものまでが、所謂下級労働に就くを耻づるやうでは、農工商其他の筋肉労働乃至中間労働界は、自ら無知無學なる徒輩の投入場とならざるを得ず、従つてこの方面に知

徳の入らざるのみか、既入の知徳までが逃出すやうになる。そこで、知徳が所謂高級労働界に偏集する結果、頭顱のみ大にして手足の之に伴はない福助的畸形社會が出来上る事になるのである。

物質文化を偏重して精神文化を輕視するの俗悪なるは云ふまでもないが、さりとて、精神文化を偏重して物質文化を輕視するも亦愚の骨頂である。兩者並進する所に、人生の幸福、人間の優

化があるのである。むづかしさうに見える精神文化は、一夜に作られたかの觀がある。黄人文化では孔孟の儒教、老莊の道教、白人文化に於ては、釋迦の佛教、耶穌、マホメットの基督教、回々教などは、著しい例であらう。所が、兎角輕視され勝の物質文化は、さう、たやすく創造されるものでないことは、歴史が之を證明する。

歴史はまた、精神文化の發達は、必ずしも物質文化の發達を伴はないが、物質文化の發達は、案外精神文化の進歩を伴ふを示してゐる。衣食足つて禮節を知るといふのであらう。

米國は物質文化の權化のやうに思はれ、中には視察もせず俗惡視してゐるものさへある。

所が、米國生れの米人は案外淡泊、正直、親切であり、骨肉間の啗合少く、仲々親孝行ものが多
い。よく溜めるが、また、よく之を散ずる。米國にだつて貧乏人も居ればルンペンもある。しか
し、生活難の爲に投水したり、醫藥を得ずに病苦するものはない。矜寡孤獨、廢疾者皆養ふ所あ
りで、辛い所に手が届いてゐる。これぞ精神文化の發達でなくて何であらう。如何に精神文化が
發達しても、一少部分の翫弄物に止まるでは、眞の發達とはいへない。

印度は、精神文化偏重の著例だ。印度人は筋肉労働を賤視して、之を土人及び混血族に押付
け、自分等は宗教、哲學、魔術などの精神文化に浸つた。その結果として宗教や魔術の發達は、
最高峰に達したが、物質文化は其割りに發達しなかつた。殊に武器と來ては、玩具に毛の生いた
位のものであつた。かうして印度は、頭顱のみ大にして手足のふらくする福助民族となつたの
である。これでは亡國も己むを得ないではないか。これと云ふも印度人が、労働に上下の差別を
設け、精神労働を尊び、筋肉労働を卑め、知徳が精神労働界に偏重し、筋肉労働界には、不徳と
無知のみが取殘されたからである。

顧みて日本は何うか。粗製濫造は、殆んど國民性であらるかのやうである。武士道の旺んなり

し徳川時代、我國唯一の貿易港であつた長崎に於て、日本の商工業者は、粗製とこまかしとで、
悉く外商の信用を失つたといはれる。人を見たら泥棒と思へ、嘘は商賣の秘傳、うまく油を賣る
が労働の極意、これが當時の金科玉條である。これでは、物質文化の發達されやう筈がない。今
でもこの卑むべき弊風は殘つてゐる、時々お里が現はれるからだ。これといふも、あまりに精神
労働を尊重し、筋肉労働を輕視したからで、換言すれば知徳が精神労働界に集中し、筋肉労働界
は爲に、知徳の飢饉となつたからだ。

假りに鍛冶屋、桶屋、井戸掘、一杯屋、飯屋、八百屋、酒屋、旅宿等總ゆる筋肉労働界乃至中
間労働界に、大學卒業程度の人物が、見出されるやうになつたとしたら何うでせう。これだと知
徳が一方に偏集せず、社會の隅々に行渡ることになるから、これ等の方面に特有視せられた俗悪、
不潔、不體裁、粗製とこまかし等の忌はしい陋風が、各自の自覺に依つて、漸次その影をひそめ行
くであらう。斯うなれば筋肉労働界も、その素質を高め、高級人物にも住みよき世界となる。従
つて知徳が流入する。知徳が流入すれば物質文化は否應なしに發達するのである。

民族を劣化する

前述に増して怖るべきは、労働差別観よりして大多数の民衆を、素質的に劣化せしむること、即ち種族の退化することである。

労働の神聖なることは既に述べた通りである。然るに人間の無知より、労働に尊卑の差別を設定すれば、本来平等無差別一様に神聖なる労働も、人間には心理的にさう信するやうになるのである。偶像を眞神と信すると同心理である。そして精神労働、筋肉労働といふことに相場が極まれば、少し氣の利いた者は、筋肉労働に入らうとしない。かくて筋肉労働は人間によつて、完全に卑賤化されるのである。

水は方圓の器に随ふやうに、人は環境次第優とも劣ともなるものである。既に筋肉労働が鄙賤である以上、その圈内にあるものは環境即ち鄙賤化されざるを得ない許りでなく、自動的に劣化する。労働者が自暴自棄するからである。

人あつての物だ。人間が劣化しては萬事休すである。

五 命令と服従

三 大 要 素

思慮、命令、服従は労働を形成する三大要素である。三者の中、その一を缺く、完全なる労働とならない。尤も思慮なき労働もあるが、それは本能的労働であつて、普通の所謂労働ではない。

また、思慮、命令、服従の三つが揃つても、其のいづれかに缺陷あつては、それは病的労働であつて、これ又完全なる労働といはれない。病的労働は、働いて效果少く、或は無く、場合に依つては却つて災難を招く。例へば設計に錯誤あるとき命令、服従に缺くる所なしとするも、多くは無効に終るであらう。又思慮に誤りなしとしても、命令に手落あり、服従に誠意がなかつたら、無効に終らないまでも、充分な効果は望めない。完全なる思慮、命令、服従は、労働に於ける三位一體である。

獨立労働、即ち自分の仕事を働く場合、何人が命令し、何人が服従するのかと云へば言ふまで

もなく自分自身が、三者を兼ねてゐるのである。換言すれば自身に内在する、此の三大要素が作用し合ふ所に、獨立労働が生れるのである。

命令尊服従卑の由来

命令尊、服従卑といふことは、社會一般の通念らしい。が私は、命令服従間に前後左右の別があつても、上下尊卑の別は断じて無いと信するものである。

思慮と命令の間にも、時に圓滑を缺くことあるが、命令對服従の場合には、とかく紛擾が起り易い。なぜだらう。それは命令に無理あり、或は方法の拙劣なるに因る事もあり、又服従に無知或は不誠意のあるに因ることもあるが、何といつても最大原因は、命令尊服従卑といふ誤つた俗念に囚はる所にあるやうだ。而してこの俗念は、容易に打破し難きまでに、根強いものになり終ふせてゐる。

假りに命令尊服従卑が本當だとすれば、誰だつて服従労働に就くを快しとしまし。餘義なく就くのである。餘義なく働く労働は、健全な労働でない。従つて完全な結果は望めずまた間接に悪

い影響をひき起す。

達観すれば絶対命令もまた、絶対服従もない。卵と鳥の話のやうなもので、その後分つたものでない。況んや尊卑をやだ。命令より服従となるが順序だが、服従より命令となることもある。だから其の間に、尊卑の別は勿論、前後の別も附けにくい。民の聲も道理に適合すれば、天の聲である。天の聲には、いかな命令も服従せねばならぬ。道理に背くは破滅の外はないのである。

然らば何うして、命令尊服従卑観が発生したか。それは丁度、人と労働、物と労働の混同される所に、労働尊卑観が発生したやうに、人物や地位と命令服従とが動もすれば、混同される所に由来する。成程命令労働は、上流系が独占し、服従労働は平凡人に限られてゐるかの観がある。ために、命令尊服従卑観の発生するは、避け難いことだが、併し命令や服従と、人物や門地の上下とは、全然別なものだ。また、上流者必ずしも命令者と限らず、凡人必ずしも服従者でもない。とは云ふものの、命令労働は自然に上流系に廻り勝ちである、が、これは、適材適所の自然の理法の然らしむる所で、命令と服従との間に尊卑の別あるが故でない。

場合にもよるが、前尊後卑の觀念が人心を支配する。殿様が前で家來が隨ふからだ。命令先づ發し、服従これに順ふ。命令が前で服従は後である。此所にも錯覺を起し易い因子が伏在する。併し前後は、必ずしも尊卑の生ずる理由とはならない。前後は方角、行程等の標識であつて、尊卑、輕重等の標識ではない。

命令と權力

命令と權力、命令と制裁も亦混同され易い。此所にも命令尊服従卑觀の生すべき原因が潜んでゐる。成程命令に權力と制裁とが、多くの場合隨伴する。單なる隨伴であつて、命令そのものに、さういふ力の本具されてゐるといふのではない。命令と權力又制裁とは全然別箇のものだ。命令とは唯爲すべし、爲すべからずと傳達するだけの行動である。權力、制裁を伴はないでも命令は先在する。制裁を伴はない命令の行はれる時、或は命令せずして命令の行はれる時、別語でいへば、無爲にして社會の治まる時が、人間の目指す黃金時代なのである。制裁の脅威によつて行動する所に、理想郷のある譯のものでない。道理ある命令ならば、服従はこれに順應せずをれ

なり。一步進めば、令せずして行はれることになる。權力は服従に反逆行爲の生ぜし時、制裁となりて命令の徹底を期する手段に過ぎない。權力なくも命令は存在する。

また、命令と暴力、服従と屈従とを混同してはならぬ。暴力は無理の塊りだが、命令は道理以外に出ない。暴力に従ふは服従でなく屈従であり、命令に従ふは順應であり、合致である。

權力は命令の背後にのみ控へてゐるやうであるが、必ずしもさうでなく、保護者として服従の背後にも光つてゐる。併し容易に發動しない。發動する機會が少いからだ。また、さうあらねばならぬ。服従者の背後に光る權力の出勤する時は、多くの場合、時局の重大化した時である。服従が無權力であるかに見ゆるは、之がためである。

命令者も人間であれば間違なしといへぬ。間違つた命令は、之をどうする。矯正しなければならぬ。又亂暴なる命令には、場合に依つては制裁を加へねばならぬ。亂暴なる命令を押し通さうとするは、沒道義であり罪惡である。しかし之が矯正者、制裁者たるものは神か、でなければ服従側でなければならぬ。矯正の方法として注意、勸告、陳情等あり、制裁のそれとしては、罷業などが挙げられる。正當なる矯正手段の前には、いかなる命令者も之に服従せねばならぬ。この

場合、地位顛倒して服従者は命令者に命令者は服従者に逆轉する。世の中は、うまく出来てゐる。かく觀じ來れば、權力は命令、服従の構成分子ではなく、これ等と別個に存在し、常に第三者の地位にありて、命令、服従の常道を辿るや否やを監視するものなりと見るべきである。この意味で權力は、労働上からいへば正義の警官である。之を要するに命令と服従は、主人對奴隸、或は暴力對屈從の關係ではなく、前後左右の關係であり、その間に尊卑の別は、斷じてない。思慮、命令、服従は労働構成上に於ける、缺くことの出来ない三大要素であり、他面から見れば労働上の分業でもある。人には各々長所がある。各人は長所に應じて、三者の中その何れかに従はねばならぬ。

命令と魅惑術

命令にも上手と下手とある。上手とは人使ひのうまいことだ。人使ひがうまければ、命令よく行はれ、下手だと、その反對となる。命令術は、一種の技術である。

命令術に似て、その實さうでないものがある。假りに魅惑術といつて置かう。命令術は服従者を生かして働かすが、魅惑術とは人を殺して働かすことだ。換言すれば人の心を惑亂し、人を道具化する事で、人を催眠術にかけるやうなものである。この術にかかると服従労働者は、一切術者の意のままとなり、ひどいのは死をも厭はないやうになる。この場合服従労働者は、もはや獨立人でなく一種の道具であり、正常人でなく精神病者である。労働學上の服従とは、獨立自由なる意識の下に、命令にびつたりと順應することであり、魅惑術的服従は、意識を失ひ、單なる道具となりて働くことである。労働者たるもの、斷じて魅惑術中に陥つてはならぬ。

人を見ず命令を見よ

服従労働者は、人を見ず命令を見ねばならぬ。それは命令者の人物の如何に左右されずに、一意命令に順應せよといふことだ。

命令と命令者とは、自ら別物だ。命令者は、命令の傳達使に過ぎない。苟も命令にして合理的な限り、命令者が小供たると大人たると、將た偉人たると、凡人たるとを問はず、服従者は誠心誠意を以つて之に順應せねばならぬ。人間も此所まで來んかぎり、眞の正常労働者といへない。服

従労働者が、命令者の人物如何によつて、働きに手加減が生ずるやうでは、それは命令者に對する感情を労働に轉嫁するもので、神聖なる労働を冒瀆するの甚しいものである。斯ういふ種類の人は、魅惑術には詭向の人である。

命令よりも人に重きを置く服従は、命令對服従の關係でなく、人對人の關係である。人對人の關係に於ては、命令の是非善悪は問ふ所でない。命令する人物の如何によつて、或は働き或は働かないのである。人物第一命令第二である。かかる労働現象は、野蠻時代に溯るほど多くなる。人を見ず命令を見よ。この標語は、労働上の原則でなければならぬ。されど窮屈に解釋しては困る。人を見ずとは、全然命令者の人格材能を、考慮外に置けといふのではない。命令、服従執れにせよ、それ相應の人格と能力を必要とするや、論を待たない。其材にあらずして其職にあるは、どの道よくないことだ。

適材ならざる命令者の下に働くことは、全く辛いものだ。されど命令者に對する不平を労働に轉嫁してはならない。命令者に缺陷あつても、與へられた労働は、尋常に之を爲さねばならぬ。そして働きつつおとなしく、しかも嚴肅に命令者の反省を促すのである。労働者のこの紳士的態度に、降参しない命令者は少いやうだ。

六 労働及労働者の分類

根本的分類

労働を根本的に分類すれば、本能的労働、意識的労働の二つとなる。
本能的労働とは、また無意識的労働ともいつて、思慮を用ゐず、用ふるも極めて少く、自然の促すが儘に行動することだ。赤ん坊が學ばずして乳を呑み、泣いて故障を告ぐるが如き、また人間が、塵芥、破片などの飛來する時、無意識に閉眼、舉手之を防ぐが如き、また蜂や蟻が、來る冬期に向つて、食物の蒐集をなすが如き、總てこれ本能的労働である。

本能的労働は、一見何でもないやうだが、どうして、これ程大切なものなく、これなくしては、生物が發生しても成育しない。

意識的労働とは、意識して働くことで、別語でいへば、思慮に導かれ、思慮しつつ、思慮を伴

ひつつなざる動作で、普通に労働とは、之を云ふのである。

本能的労働は、思慮なきに先在し、意識的労働は思慮あつて後に生ずる。思慮は人間以外の動物にはない、あつても微少である。思慮あるものは人間ばかりだ。だから意識労働は人間に限られる。動物は、本能労働によつてのみ生存してゐる。

意識労働の分類

更に意識労働を分類するならば、頭腦労働、筋肉労働の二つとなる。併し筋肉労働といつても、全然知識を除外し、また、頭腦労働と稱するも、一切筋肉を使はないのではない。要するに主として精神、知能を用ふるのが頭腦労働であり、また、筋肉を主として働かすのが筋肉労働である。

學者の頭腦労働であり、工夫の筋肉労働であるは一目瞭然だが、何れとも附かない曖昧なる労働も亦少くない。例へば常習的に決つたお経や祝詞をあげるだけの僧侶労働や、神主労働などは、人造人間にも出来ることで嚴密なる意味では、精神労働に遠いやうだ。更に事務員、外交員

などの中には、精神、筋肉兩者の間を行くものもある。とすれば労働は、頭腦、筋肉、中間の三つに分類する方がよいかも知れない。

また更に意識労働は被傭労働、獨立労働の二つに分類される。被傭労働とは、傭はれて働く労働で、賃銀或は名譽と交換に労働を賣るもの謂であり、獨立労働とは、自分の仕事を自分が働くことで、自作農、店舗經營者などがそれである。

叙上の分類によれば、面白い對照が発見される。即ち被傭労働者として大臣と工夫と同列であり、一杯屋の老爺と大事業者とは、獨立労働者として並立する。

さて、此所に、特に注意を要することは、被傭労働に似て、その實然らざるものがあることだ。私は之を從屬労働といつて置かう。從屬労働とは、自己の意志に反して強制的に働かさせられることで奴隸労働を第一として所謂監獄部屋労働、賣られて爲す賣春労働、年期小僧労働などがそれに屬する。

從屬労働は労働の本義に反き、労働の神聖を汚す未開野蠻の遺風である。これは絶対に排斥せねばならぬ。但刑罰として囚徒に、または懲戒の意味に於て遊食者に労働を強制するは、已むを

得ないであらう。
その他見様次第労働は、なほ幾通りにも分類出来るが、あまり必要がないから、これは省略する。

労働者の分類

ここに、労働者の分類とは、労働の分類による所の労働者の分類ではなく、労働者の素質を標準としての労働者の分類である。例へば甲は紳士的態度を以つて、誠實に、無駄なく働くに、乙は下郎的態度、不誠意、ごまかし根性で働くとすれば、甲は正常労働者で、乙は劣等労働者であることは云ふまでもない。これは極端な例だが、併し人に優劣あるは事實で、従つて其の等差に應じて分類の生じ来るは已むを得ない。

そんな分類なんか餘計なことだ、と云ふ人もあらう。どうして、餘計なところか、必要なのである。劣等労働者には、労働時間短縮、休養時間伸長等を要求する資格が出来てないからだ。これは追々と述べる。

苦力的労働者

労働者を大別すれば、苦力的労働者、過渡的労働者及び正常労働者の三種となるであらう。苦力的労働者の名前は、少し變だが、假りにさう云つて置く。

苦力的労働者とは、支那、南洋方面の苦力及び、それに近い労働者の謂ひで、労働者中尤も原始的な、低級な労働者の別名である。

苦力の特徴は、概して無學なること、牛馬的苦役に甘んずることにある。併し彼等は概して柔順で、正直である。嚴重に言付ければ、絶えず監視せすも、影日向なく働く傾向をもつ。この點正常労働者に近い。苦力労働者が雇傭主間に歓迎される所以は、安く働くといふだけでなく、忠實に働くからでもある。

苦力は悪性労働者でも、退化した労働者でもない。労働者の赤ん坊である。將來性を持つ労働者である。故に苦力階級には、解放よりも指導啓蒙が大切である。

聞く所に據れば、往昔東洋に來航せし歐洲人が、東洋の労働者の牛馬のやうな苦役と、みじめなる状態とに驚き、これは人間の労働でなく、牛馬の労働である。下級労働者としても餘りに低

く、さりとて奴隷でもない一種の労働階級を発見したといふので、「クローリー」なる土語を其のまま、東洋の一般労働者に當嵌めたといふことだ。眞偽は分らないが、さういはれても一言ないやうである。

労働機械の多少發達してゐる所なら、苦力的労働の必要が無い筈だ。あつても少いはづである。日本の産業は大に發達した、機械も亦進歩しつつある。併しそれは、歐米に模倣した方向に限られ、その他に於ては、舊態依然たりで、馬力や車力の代りに今以つて人肩や天秤棒が運搬機關であり、農園労働に於ては、鋤と鎌とが唯一の道具である。これでは、苦力たらざらんとするも得べからずだ。歐米人氣取りに、支那の兄弟を苦力呼ばはりするは笑止千萬である。アフリカには今猶奴隷あり、東洋には苦力がある。下級労働者の存在は、一國の耻辱であり、また種族の劣等なることを表示する意味にもとれる。

過渡的労働者

過渡的労働者とは、苦力階級より正常労働者への過渡期にある労働者のことだ。

この階級の特徴は、知識のある割合に實行の伴はないこと、權利を主張するに拔目なきも義務の遂行には左程でもないこと及び休養時間亂用癖のあること等である。だから、尤も始末に終へないものは、この種の労働者といはれる。

であるからこの種労働者は、労働の神聖を叫ぶかと思へば、平氣で労働胃液をやる。或は自他労働の間に、甚しい差別を設け、自分の仕事には全力を傾倒するが、他人の仕事には所謂雇人根性を發揮する。また或は雇傭主に對する不平を労働に轉嫁して、故らに情けたり甚しきは、器物を壊したりする。これ等は、まだしもだ。大いに考へねばならないことは、休養時間が労働者によつて、如何に使用されるかといふことだ。

休養時間の亂用は、過渡的労働者のみでなく、苦力階級にも共通する現象である。だが苦力に長時間労働は付きものである。従つて彼等は亂用する程の休養時間を持たない。労働終れば疲勞の極、直に就寝せねばならぬ。極端にいへば彼等には、休養時間がないのである。日本では、農業労働者はそれに近い。

過渡的労働者は、比較的長い休養時間をもつのが常だ。併し彼等は、休養時間を正用するまで

に進歩してゐない。ここが過渡的労働者たる所以である。

休養時間とは、休養するための時間だ。然るに之を他に亂用するとすれば、それは休養時間ではなく亂行時間である。亂行は必ず不幸を約束する。労働時間短縮問題の重大なるは云ふまでもないが、伸長された休養時間が、果して正用されるか何うかは、より重大なる問題でなければならぬ。

私はあらゆる種族と共に労働し、また、小人数ながら、あらゆる種族の労働者を使つても見たが、種族によつて随分酷いがある。私の知る限りに於て印度人労働者は、粗食で貯め主義一點張りであり、支那人は休養時間の全部と、睡眠時間の一部とを擧げて、之を賭博と喫煙（阿片も含む）とに捧げる。メキシコ人労働者は一層ひどい。休養時間は無論の事、少し金を得れば労働をやめて、之を賭博、玉突、飲酒、喫煙、喧嘩等に費やすのである。そこで私は考へた。休養時間の正用を知らないものに、労働時間の短縮を要求する資格なし、寧ろ休養時間を短縮して、高賃銀を與ふることが、彼等を不養生と貧困及び罪惡から救ふ所以であらうと。

休養時間の正用といつて、何も窮屈を意味しない。觀劇、碁、將棋、撞球等一向に差支なし。

但、度を越えざること、殊に修養に重きを置けばよいのである。休息と娛樂する許りが休養でなし。よく息み、よく楽しみ、よく修むる、これが本當の休養である。

正常労働者

正常労働者とは、よく労働し、よく休養し、よく睡眠するものことだ。煎じ詰むれば、常識を以つて尋常に働くの一語に盡きる。だから、少しの注意で誰もが正常労働者になれるのである。教育あるもの必ずしも正常労働者でない。品性の高下、環境の良否、訓練の有無多少によつて、無教育者も正常労働者となり、教育あるものも、過渡的労働者となる。

私は白人労働者と共に働き、後には白人を傭つたこともあるが、労働者として彼等は、正常労働者の水準に達し、もしくは、それに近いと思つた。

第一彼等は、偉大にして強健なる身體を持つてゐる。従つて労働に耐へる。耐へるから難労働の場合にも、精神は比較的鎮靜してゐる。精神が鎮靜してゐるから、働きに過失少く能率上がり、労働者の面目を失墜しない。

彼等の労働に臨むや、謹厳にして注意周到である。私の所謂對神心が對労働心でなければならぬ、と云ふに一致する。だから、彼等は労働中は用務外減多に喋らず、喫煙せず、まして放歌せざるは云ふまでもない。特に急ぎはしないが、ポツ／＼働き続ける。結局急いだり、休んだりする所の、むらのある労働よりも、仕事にそつがなく、能率も高い譯だ。本當の労働である。

彼等はまた、自他労働の間に、殆んど差別を置かない。自分の仕事も他人の仕事も一様に、急かす、ゆつたりと最善を盡くして働く。労働道德の發達したものであらう。

白人労働者にも、いかがはしい種類のあるは云ふまでもない。高い聲ではいへないが南歐労働者の中には、メキシコ人、支那人宜しくといふのもあつた。アルメニア人ときたら白人中でも鼻摘みものだ。狡猾の塊りである。長い間他種族の壓制下にあつたからであらう。

七 如何に労働に對すべきか

對神の心即ち對労働の心

一切の現象は、宇宙の原動力の派生せしものである。原動力は至上力である。神とは恐らくこの至上力を指したものであらう。とすれば靈妙なる労働力は、原動力の分派、即ち神の分身と見て差支へない筈だ。この見方に誤りなしとすれば、如何に労働に對すべきかの問題は、自から解決される筈だ。即ち對神の心が、對労働の心でなければならぬ。假りに労働の力が神の分身でないものとしても不正不純の心を以つて、労働に對するは愚の骨頂であり、罪惡でもある。といつたら労働は、如何にも窮屈であり、且つ實行至難であるかに思はれぬでもないが、さる心配は無用である。斯ういふ心配は、労働知識の皆無なる連中の考へさうなことで、一顧の價値もなし。常識あるものなら誰れでも、對神の心を以つて労働に對するものである。正常労働者とは、對神の心を以つて労働に對するものことである。

神に對する心を以つて労働に對するとは、誠意を以つて働くことだ。換言すれば常識に導かれ、常識に依り、常識を伴ひつつ働くことだ。獨自労働の場合は何人も、眞面目に、注意深く働く。この氣持が即ち神に對するの心である。この心を以つて、公私、自他の差別なく、一切の労働に適用するまでのことだ。考へて見れば窮屈でも何でもないのである。

労働に眞面目なれ

労働は神聖である。これを汚濁してはならない。

労働汚濁とは、労働律に違反する一切の行爲をいふのである。労働律といつても、むづかしいものでなく、自問すれば各自の良知は教へてくれる。にしても、労働教育の必要なるは云ふまでもない。労働教育は、益々明瞭に、労働律を意識せしめ、且つその實行力を強化するからだ。

労働汚濁行爲の中、その甚しいものを挙げるならば、一、労働に不眞面目なること、二、不平を労働に轉嫁すること、三、自他労働の間に、甚しい差別を設けることであらう。

不眞面目なる行爲は、労働を輕視するより起る。労働を尊重する所に、不眞面目なる行爲のあらう筈がない。不眞面目にも輕重あり、労働中放歌雜談、喫茶喫煙するなどは軽い方で、油を賣るを労働道の極致とするなどは、不眞面目を通り越して罪惡である。

作業に支障を來さない限り、放歌雜談差支へなし、甚しきは労働者をして、疲勞を忘れて善働せしむる方法なりと云ふ人もあるが飛んでもない間違ひである。

労働中は、作業以外何事も、爲さず言はずが原則である。しかし、田園労働の如き比較的粗

雑、單調で餘り頭腦を必要としないものなら、他に惡影響を與へぬ限り、低聲俚語を唸る位は、大目に見て差支ない。要するに労働中は沈黙に限る。沈黙は嚴肅、精慮、迅速を意味する。

労働中の喫茶は、渴を癒す程度なら差支へなしとするも、常習的に亂飲するに至つては労働輕視の咎めは免れない。我國におやつと稱して午後、茶菓を労働者に供する不文律があり、伊太利には茶の代りに、粗末な葡萄酒を出すことが珍しくないが、共に感心出來ない。思ふに此等の風習は労働者を釣らう魂膽から出たものであらうが、今の労働者にこの手に乗る馬鹿はない筈だ。寧ろ之を逆に利用してゐる。ために主婦が如何に迷惑してゐるか分らない。併し罪は提供者にあつて労働者にはなす。

おやつおやつの風習は、労働時間に無關心な時代に發生したものらしいが、労働時間短縮が、頻りと論議せられる現今には、全く不向の蠻風である。斯ういふ惡習のために、八、九時間労働は實質的には、六七時間甚しきは、四、五時間労働となることが珍しくない。馬鹿氣た労働汚濁である。どうせ、さういふことなら、初めから五時間或は六時間労働として、労働中は間食は勿論、作業以外何事も云はず、爲さずの原則を勵行するの労働的なるに若かならう。

如上の非労働的弊風が、或限られたる労働界に止まるなら、まだしもだが、知識労働界にも行はれると云ふに至りては、呆れて物がいへないのである。

御役所労働は、頭腦労働であらう。明治時代の役所は、中央、地方たるを問はず、事務所兼喫茶倶楽部の觀あつたと聞く。これが悪口なら幸である。また、昭和の今日我國に於て、非労働的の尤なるものとして、諸官廳が擧げられるやうだ。火の無い所に煙のないものとすれば、多少の確實性はあらう。何事も模範とならねばならぬ筈の役所労働がこの始末では、日傭労働界におやつ制度の存在するは、怪しむに足らずである。

不平の轉嫁

ここに不平の轉嫁とは、人に對する不平を労働に轉嫁して憤けることである。所謂坊主を憤んで袈裟に及ぶ類で、馬鹿の骨頂である。

云ふまでもなく不平と、労働は別だ。故に不平あつても、労働争議中であつても、苟も働きつつある間は、平常通り平常の心を以つて働くが當然だ。まして暴行するなど、以つての外の曲事

である。

さり乍ら、不平を忍んで雇傭主に屈服せよといふのではない。その不平が合理ならば、必ず除去せねばならない。それには第一懇談である。正當なる要求ならば、雇傭主側も無下に拒絶されるものでない。若しも容れられなかつたら、進んで輿論に訴へ、官意を動かすべきである。それでも尙肯んぜざる時は、最後の手段として罷業するも已むを得ない。いづれにせよ、不平を労働に轉嫁して自ら慰むるが如きは、紳士の爲すまじきことだ。

自他労働の間に差別を置くな

獨立労働と被傭労働とで、その氣分に多少の相違あるは免れないとしても、自分の仕事には全力を擧げて之に當り、被傭労働になると、手を翹すやうに急に冷淡、不面目になり放歌、雑談甚しいのになると、出来るだけ油を賣らうとするは、善くないことだ。見様によれば、これは労働ではなく、一種の詐欺取財だ。前にも述べたが、獨立労働に對すると同様の心を以つて被傭労働を爲すは、決してむづかしい事でない。誰にも容易に出来ることである。のに、自他労働の間

に、卑むべき差別を置く、何といふさもしい心であらう。

自他労働の間に、醜い差別を置くもの、必ずしも下級労働者と限らない。労働意識の發達しない國では、寧ろ多少の教養ある労働者間に多い。不可解の現象のやうだが、これといふも從來、労働教育が閉却されたからである。

労働者といへば、輕視され勝ちだ。自分も之を怪しまない。怪しまないから、つまり、醜い労働行爲に出るやうになるのだ。

學あり、金あり、門地の高いもの必ずしも紳士でない。紳士とは、正しい心を以つて、正しく働くものことである。門地の高下、學問、資産の有無多少は、問ふ所でない。労働者に資本、學問あるものは少い。しかし、正しい心を以つて正しく働く者は、案外に多いのである。これぞ神を辱しめない神の子であり、紳士である。労働者はここに目醒め、自重自尊すべきである。自重者に、労働汚行爲はない。

八 労働者と自尊心

自尊心

自尊心とは自輕自卑せず、自重し自尊する心である。下手すると自尊を學んで自惚れに陥り易い。自惚は陋劣、驕慢、愚痴であり、自尊は高ぶらず、さりとして自卑せず、常識恒心に伴はれて常道を行くものである。從來筋肉労働者は、餘りに自卑し過ぎた。換言すれば自尊を忘れてゐた。自尊心なき労働者は、精神的には奴隸も同じである。

自尊といへば、何となく勿體らしく、其日暮しの労働者には、望まらべくもないやうだが、決してそんなものでない。誰でも自尊心を持たないものはない。それを磨けばよいのである。而してそれは、至つてたやすく行へると思ふ。

自尊に入る道

自尊に入る道に、二途あると思ふ。それは内部より行くものと、外部より入るものである。前者は哲學的研究、或は宗教的修養等であり、後者は姿勢矯正である。

從來我等凡人は、前者のみを、自尊に入唯一の門と考へてゐたのだが、さうとすれば、極めて少數なる知識者か、或は生活に餘裕あるものでない限り、衣食に追はれ勝ちの一般労働者は、自尊知らずに一生を終るようになるが、どう考へても、かかる不公平、不合理のあるはずはなく、また、神はそれ程親切でない。何かそこに、萬人向き解脱の便法がなければならぬ筈だ。愚考によれば、萬人向き便法としては、後者即ち姿勢矯正以外にないと思ふ。勿論、完全とはいへまいが、この方法だと、無學者でも容易に出来る筈だ。

姿勢矯正とは、文字通りの意である。正しい姿勢とは、歪みのない正常體、生れた當時の姿勢である。然るに人生の久しい間には、種々雑多なる動機から、身體に異常を起し易い。これは萬人が萬人といひたい。

歪める姿勢に健康體はない。健康ならざる身體に、正しい精神は宿らない、宿つても永居しない、自尊心もないのである。どうすれば體を歪めず、また、どうして既に歪んだものを直す

かといへば、姿勢を矯正するのである。即ち正臥、正座、正歩、正動することである。古人の心を正せんとせば先づ形を正ふせよ、とは至言である。自尊は正しい心の中にあり、正しい心は正しい姿勢の中にある。

孟子は、居は心に移すといつた。居とは環境のことである。環境が心を感化するといふのだ。朱に交れば赤くなる。環境の感化力や殆んど不可抗的である。

環境は、大にしては風土、國情、小にしては家庭、友人などだが、最も精神に直接する環境は身體である。故に風土、國情に應じて特殊なる國民性、或は地方的氣風が生れ來るやうに、身體の大小、強弱、醜美が、宿す所の精神に影響しない筈がない。否、直接するだけ一層、重大なる影響を與へる筈である。

健全なる精神は、健全なる身體に宿る。不良少年少女の多數は、共通した先天的或は後天的肉體上の缺陷、特徴をもつと云ふが、さもあるべきことと思ふ。

試みに姿勢を正ふしてご覧。何となく高尚清澄なる心地となるだらう。この心地が淨化された精神であり、今まで潜在してゐた自尊魂の出現である。反對に、だらしない姿勢となつてご覧。

自尊心も、清い精神も引つ込んで締りのない、だら／＼した、下劣な根性が涌き出るだらう。この各自の實驗は、姿勢の整正と否とが、如何に精神と重大なる關係のあるかを立證するものである。

昔の武士は、禮儀作法の名の下に、比較的理屈にかなつた姿勢整正が強制された。これ武士が自尊心の保持、向上をなし得た所以の一つであらう。

姿勢整正道場

姿勢整正は、終生の行でなければならぬ。嬰兒時代に姿勢整正の必要なるは云ふに及ばず、小學校に於ては、特に姿勢を正さしめ、それを習慣附けることが大切だ。幾ら知識を注入し、忠孝の教を授けても、歪んだ姿勢では、實行が困難であらう。否、折角養つた忠孝觀念も、逃げ出す怖れがないと云へなす。

身體髮膚これを父母に受く、敢て毀傷せざるは孝の始めなり、と孔子は教へた。毀傷せずとは單に傷けるなど云ふだけでなく、整正せよといふことだ。歪んだ姿勢は、身體の毀傷であり、身

體の毀傷は不孝であり、不孝はやがて不忠となる。忠孝の本場である日本に、比較的賣國奴が多い。日本人の身體は發育不完全といはれるが、何かそこに關係があるのではあるまいか。

學生時代以後の姿勢整正法としては各部落に姿勢整正道場を設けることである。體育道場といつてもよい。而して姿勢整正は、生理に適つて行はなければならぬ。専門家の指導に委ぬるは云ふまでもない。

道場を設けても、姿勢整正のみでは、あまりに呆氣なさ過ぎ、來會者の興味を殺くおそれなしとせぬ。同時に保健、修養、労働等の諸問題に就き、討論し或は先輩の所説に聽き、たまに素人演藝など催すことにすれば、修養、慰安ともなり、一石二鳥の效果を見るだらう。此の種の會合は、慰安の少い農村には、特に詠向きと思ふ。

部落には、道場及び集會所として、建物の一つ位は是非欲しいものだ。已むなくんば神社、寺院、學校等を利用すべきだ。道場は單に、姿勢整正の基本を教へる所、實行は道場外——行住坐臥に於て爲さねばならぬ。

労働者に自尊心の擡頭は、虎に羽翼を添へるもので、労働嫌惡、罷業亂發、果ては労働者獨裁

などいふ危険思想に走らしめはしまいか、と危ぶむ人もあるが、それは杞憂に過ぎない。自尊心に富むもの程、労働に忠實であり危険思想の捕虜とならず、雇傭主側も、かかる人格の労働者には、敬意を以つて對するやうになるから、勞資の間も圓滿に行くことになる。従つて罷業も大に減少する。

服装も環境

服装の良否も亦直接、間接自尊心と重大なる関係がある。いかに姿勢が整つてゐても、服装が餘りに野鄙では、自尊心も萎縮せざるを得ない。

例へば袴、羽織を着用に及べば、何人も姿勢を正すやうになる。努めて正すといふよりも、自然に正しくなるのである。しかし、半纏、頬冠の扮装では、姿勢も見榮もあつたものでなく、精神に崇高味を失ひ、自尊心鈍り喋り放題歌ひ放題のふしだらとなる。これは労働者に限らず、相當の人物でも、半纏、向鉢巻の服装となつては、以前の精神状態を維持するはむづかしく、自尊に遠ざかり行くは免れない。服装は肉體に次いで、精神に最も近い環境を爲してゐる。この環境

が醜劣化しては、獨り精神のみ優秀たり得ない。といつて、羽織袴や燕尾服で働けといふのではない。活動に便利な。體裁の下品でない、安價にして丈夫なものを着用せよといふのである。

日本の労働服は、半纏、腹掛、股引、足袋、鞋、手甲、脚絆等から成り立つてゐるが、仲々よく出来てゐる。難をいへば型に於て少し下品であることと、服地が粗雑過ぎることである。頬冠、鉢巻の滑稽なるは云ふまでもない。労働者は品位を落してはならぬ、旁々日本労働服改良の必要がある。改良面倒とあらば、より體裁の上品な西洋労働服をそのまま、或は多少の改善を加へて用ふるがよい。この程度の服装なら、爲に労働者の自尊心を傷けることはあるまい。

日本農村婦人の労働服は、男子のと同小異だが、外人には、輕便で且捨て難い風情ありとして、大に褒めるものがある。それは確かに労働に便利なるばかりでなく、多少人に好感を與へ、形に於ても上品でないまでも悪くはない。型に多少の改良を加へるならば、婦人の不斷着として、蓋し世界一であらう。少くもあの駄羅くした賣笑婦見たいな、今の西洋婦人服に優る萬々である。

洋服と我が労働服は、その基本設計に於て精粗雅俗の違ひはあるが、大同小異である。即ち洋

服は人の氣位を高めないまでも低めないが、後者は、どうも低めるやうだ。これは洋服が世界の衣類中、最も人智の注がれた型換言すれば最も進歩した服であるからだ。

軍服は理想的労働服である。假りに半纏、股引を今の軍服に代へたら何うか。士氣が保てるだらうか。忠君愛國の念に燃ゆる我が軍人でも、それでは何うかと疑はれる。昔から高官の人は、厳しい服を纏ふことになつてゐるが、これは多少虚榮心も手傳つてゐるとしても、主たる眼目は、これでなければ到底、軍人魂や高官精神が保てないからだ。太政官と染め抜いた印半纏服着用では、太政大臣も、關白もあつたものでない。

労働者に自尊心は必要である。自尊心ある労働者にして、初めて眞の労働が出来るのである。それには、姿勢を常に整正すること、及び自尊を傷けない程度の服装を爲すことである。姿勢整正は結構だが、筋肉労働者には窮屈過ぎる、といふ人もあらう。だらしのない姿勢に慣されたものとして窮屈感の起るは當然だが、それは一時で、少し辛棒すれば、窮屈どころか、却つて輕快を感じるやうになる。

九 労働と遊食

遊食者

社會は見る方角によつて、種々なる形状となる。例へば政治方面から眺むれば、支配と被支配、或は貴族と平民、生産方面からは資本労働、或は又、有産無産等となり、更に労働方面より見れば、即ち労働遊食の對立となる。

しかしして此等階級を構成する分子は、必ずしも一階級に專屬せず、各階級の間に入錯してゐる。例へば平民にして支配、支配にして無産、無産にして知識、知識にして遊食、遊食にして有産、有産にして無知識、無知識にして貴族など、千態萬狀である。

更に此等各階級の間には、緩急強弱の差はあるが、古來何等かの形に於て、背反、闘争が行はれて來た。而して此等の階級闘争中、近來世人の耳目に、特に顯著なるは、資本對労働のそれである。然るに當然起らねばならぬ筈の、労働對遊食の間に、從來目立つた背反、闘争のなかりし

は、如何なる譯であらうか、そこにさうなる理由あるにせよ、不思議といへば不思議である。

ここにいふ労働者とは、筋肉労働者のみでなく、一切の労働者を指すものであり、遊食者とは、働かざるもの、働いても其の労働量の極めて少きものを云ふ。換言すれば怠惰者、乞食、盜賊賭博常習者、労働力の未だ消耗せざる所の隱居、高等遊民等が、それである。

避けられない事情の下に、働けぬ境遇にあるもの、例へば老衰者、幼者、病人、不具者等は、云ふまでもなく遊食者でない。彼等は働かないのでなく働けないのである。これとは反對に遊食者は、働けないのでなく働かないのである。遊食者乃至類似者の跋扈する時國家は必ず崩壊する。彼等は國家社會に於ける、獅子身中の蟲である。

社會は一大労働組合

人間は労働の動物である。従つて社會は取りも直さず、一の大なる労働組合である。されば社會は、各自分に應じて働き、何ものかを寄與し合ふことによつて存立し、繁昌する。而して又各自が寄與する労働量の多少、労働質の良否如何によつて、社會は進退し、盛衰すること、影の形

に従ひ、響の聲に應ずるやうである。働けものの寄合ふ所に繁昌なく、勤勞者を網羅する社會に疲弊はない。

社會はまた一大百貨店

社會はまた、一大百貨店であつて、民衆はその顧客である。商店は代金と引換に、物品を賣渡すことによつて存立し、多く賣ることによつて繁榮する。社會或は國家といふ百貨店も亦同様、に代金引換に有形無形の物品を配給することによつて存立し、賣行益々良好なるに伴れて發展する。社會の要求する代金とは、金銀の貨幣でなく、労働と稱する貨幣である。無形の品物とは、社會の與ふる大小各種の名譽の意である。故に労働と稱する代金を拂へば、欲する何物をも得られ、より多く支拂へば、即ちより多く働けば、それだけ、より多くの品物、名譽が得られる。もしも労働といふ代金を拂つて、なほ品物が與へられず、與へられても少いことがあるとすれば、それは、社會組織のどこかに缺陷があるからだ。

商店は、回收不能の賣掛金が多くなれば潰れる。潰れないまでも振はない。社會と稱する百貨

店も同じことで、借倒客が多くなれば立行かなくなる。借倒客とは、代金を支拂はずに衣食するものことで、地位の高下、資産の有無を問はず、あらゆる遊食者がそれである。金持でも、ぶらぶら遊食してゐるのは、借倒客である。

不拂客の中には、働きたくも仕事なく、代金の拂へない人がある。この種の不拂客は労働學上遊食者でない。遊んでゐるのでなく、不可抗的に遊ばされるのだからである。寧ろ社會に扶養の義務がある。この種の不拂客を餓死せしめることは、結局社會自身の倒壊を意味する。

遊食は労働正面の敵

労働の正面の敵は、資本でなく遊食である。

資本なくも労働は存在するが、労働なき所に資本は現れない。労働と資本とは、親であり子である。離反すべき筋合のものでない。喧嘩は免れないとしても、一時性的のものである。然るに他人の勤勞に寄生する遊食は、どの點から考察しても労働の敵である。微塵も妥協の餘地がない労働の敵とは、取りも直さず人間の敵と云ふことだ。

所が、親和しなければならぬ筈の労働と資本の間には、喧嘩が絶えないのに、氷炭相容れない勞遊の間に絶無といひたい程、紛争の起らざりしは何故であらうか。そこに三つの原因があるやうに思はれる。

その一は、遊食者にはピンからキリまであり、しかも各階級間に散在寄生してゐるので、勞遊爭議の對象となるべき團結性を缺いてゐることである。しかしこれは、遊食側には勿怪の幸であつた。遊離してゐるものは、茫漠として掴み所なく、征伐しようにも暖簾に腕押で出来ないからだ。でなければ、少くも知識階級間には、遊食者は跡を絶つてゐる筈である。

第二の理由は、上層社會に於ける遊食は當然であり、少くも咎むべきでない、甚しきは人間榮達の極であるかの如くに考へられて來たことである。斯ういふ思想の存続する限り何人も、一旦上層階級に登攀せしからは、失職しても飯の食へる間、甚しきは食へなくなつても、彼等の所謂高等労働以外の労働に就くまいとするに不思議はない。かくして上層社會に關する限り、遊食肯定、或は遊食崇拜の傾向を馴致することになつたのである。

西洋では、華族で一杯屋を営み、大統領の息子が、筋肉労働に傭はれるなど、少しも珍らしく

ない。人に能不能があり、労働に貴賤なし、働かざるが罪惡なりで、歐米かぶれして云ふのでないがこれではなくては、いけないのである。歐米諸國の比較的富んでゐる最大原因は、ここにあると云はなければならぬ。

第三、下層遊食者即ち乞食、遊び人、詐欺師等は、時代によつて多少寛嚴の差はあつたが、古來それ／＼訓戒され、懲罰されては來た。併しそれは、遊食者と云ふよりも寧ろ厄介者退治の意味に於てであつた。彼等の厄介者たるは云ふまでもなく、その或者は怖るべき惡黨でもあるが、併し彼等の多數は、精神薄弱者である。憐むべく惡むべきでない、斯ういふ所から、彼等に加へられた制裁は或は寛きに過ぎ、又或は方法その宜しきを得なかつたかも知れない。これといふも、遊食の如何に怖るべきかが、充分に世間に知られてなかつたからである。

遊情、徒食の社會的罪惡たるは、東西共に符節を合はすが如く教へられて來た。併しそれは強い意味に於てではなく、軽い意味に於てであつた。何故なら、遊情、徒食に對しては懲罰らしい懲罰がなかつたばかりなく、訓戒者自身が、さも特權であるかの如く、遊食或はそれに近い寄生々活を食ひ乍ら、下層階級にのみ奉仕的、奴隸的勤勞を教へると云ふよりも、寧ろ強制したから

である。少くもさういふ色彩があつたからだ。これでは、遊食氣風の下火となる筈がない。

若しも遊食者を訓戒し、懲罰するに厄介者惡る者として對する以外に、遊食根絶といふ社會政策的意圖の下に、配慮行動したならば根絶と行かないまでも、それに近い成績を挙げ得たであらうと思はれる。明治の初期、嚴重に乞食、博徒を取締つたことあり、私の郷里では餘程長い間、遊人は屏息し乞食は跡を絶つたと云ふが、これは乞食が残らず餓死したのでなく、何處かで働いてわたに相違ないのである。遊食退治は、やつて出來ないのでなく、やらないのである。

遊食亡國

遊食の情風が盛んになれば、國は必ず亡びる、でなければ癡國も同様となる。

王朝時代の布哇は、上下を通じて即ち全面的に、遊情氣分旺盛の國であつた。遊情でも生活の出來る桃源の仙境であつた。だから布哇人は遊情と思はなかつた。

斯ういふ譯で當時の布哇人は貯蓄心が乏しかつた。人の物は我が物、我が物は人の物であつた。たま／＼儲けたものがあると、親戚知人がやつて來て食ひ盡さなければ止まなかつた。ここ

から働くだけ馬鹿と云ふ觀念が、八島を風靡したのであつた。これでは産業起り文化の進む筈がない。それでも外國との接觸がなければ亡國の心配はないが、英米人に見込まれたから堪つたものではない、亡國の上、民族までが混血と自滅作用とに依つて、殆んど全滅に瀕してゐる。

遊食情風の下層階級に瀕死してゐる國としては、メキシコなどであらうか。メキシコ人も貯蓄心に乏しい。財産に自他の見境がはつきりしない。人の物は我が物、我が物は人の物で、働くだけ損の國である。メキシコは獨立國である。併し米國人は、自分のものと決めてゐる、第三者もさう見てゐるらしい。變な獨立國のあつたものである。

遊食氣分の上流階級に濃厚なるは、何としても支那を推さねばなるまい。

支那は萬年土匪國である。政匪、軍匪、財匪、共匪である。土匪とは、暴力を以つて他人の勤勞に生きんとするもので、遊食圏内の親玉である。

支那に關する限り、土匪と支配階級との見境がはつきりしない。土匪一變すれば宰相であり、將相失脚すれば、去つて匪群に投するのである。これは支那開關以來の風習で殆んど國民性化してゐる。

支那は又賭博の國である。支那に於て賭博は、殆んど國技化されてゐる。賭博は遊食の尤も著しい現はれの一である。支那人は賭博なしには、生きて行けない國民である。文武の高官、土豪、紳士博徒ならざるなしである。以つて如何に支那の上層階級の悪性遊食氣分に濃厚であるかが知られるであらう。

支那で眞面目に勤勞してゐるものは、被搾取群即ち大衆ばかりだ。支那が亡びさうで亡びず、亡びても直ぐ復興し。また種族的膨脹を續けて來たのは、政匪、軍匪のお蔭でなく此の勤勞大衆の有する偉大なる膨脹力のお蔭である。が、賭博の國とて、この勤勞大衆にも一攫千金思想浸潤し、一日も早く左團扇で蓄妾、阿片の極樂生活をして見たいと云ふのが、彼等の理想である。

と云つて支那民族は、劣化しきつてゐる譯でない。世界の文化を大別すれば白人文化と黄人文化の二つとなるが、その黄人文化の創造者は支那人である。多少種族的劣化を示してはゐるが、今猶優等種族の一たるを失はない。であるから彼等は、支那が今のやうに匪閥割據を續けてゐては、結局亡國或は共同管理の民となることは、百も承知してゐるが、同時に何とか理屈をつけて統一を妨げる。これが亡國病に罹つてゐる所だ。これといふのも、傳統的なる搾取生活、遊食生

活思想が潜在意識となりて彼等を支配してゐるからである。支那の上層に瀰漫浸透する此の悪性遊食気分が一掃されるでなければ、支那は結局亡國は免れない。でなければ癡國状態がつゞくであらう。

一〇 筋肉労働三十年

被傭労働時代

自分は過去三十餘年、あらゆる労働を試みた筋肉労働者である。といつたら讀者の中には、ああ、さうかと云つて巻を閉ぢる方があるかも知れないが、そこがお願ひだ、是非しまいまで讀んでいただきたいのである。理屈を云ふやうだが、智者も千慮に一失あり、愚者も千慮に一得ありで、労働者必ずしも眞理を發見しないものと限らないからである。眞理と秘訣は、宇宙の間に書かれてある。何人が之を發見するか分つたものではない。

出稼する前の私の労働觀を申せば、労働は下等ではあるが、苦痛なるものとは思はなかつた。

労働者の働き振りが、如何にも元氣よく愉快げであつたからだ。併し實際に働いて見ると、そこに思ひ設けぬ苦痛があり、又馬鹿らしいもののあるに憂鬱ならざるを得なかつた。

當時米國の野外労働時間は、十時間乃至十二時間であつた。決して短い労働時間ではなかつた。それでも流石は米國だ。給料は高いし、主人も威張らず、その他の労働條件、慣例等比較的好良であつた。にも拘らず、労働は苦痛であり、従つて堪へ難い嫌厭の情は、どうすることも出来なかつた。一刻も早く足を洗いたいと思つた。

何故に労働が、かくまで厭やなのであらうか、と云ふに、最大の原因は、労働時間の過長なためである。その證據には、短時間の労働では疲勞少く、嫌やでも我慢出来るからである。今にして思へば、六日労働一日休息の米國であつたから、良かったものの、週休なしの、のべつ暮なしに働かさせられる國であつたら、自分のやうなものは、今まで生きてたか何うか疑問である。少くも頭腦の硬化した、もの言ふ労働機械に成り了ふせたことであらう。

氣の利いた連中程、早く足を洗つて歸國した。そして政界、財界に頭角を現はしたものは少くない。だが鈍重な私に、その出來やう筈がない。また目的でもなかつた。光陰矢の如しで、貴

重なる年月は、遠慮なく過ぎ去つた。無言で働いてゐると、何人の脳裡にも回顧、疑問、空想など色々と去來するものだ。所謂畫夢といふ奴だ。

或時私は畫夢を食りつつ働いてゐたが、ふと人は労働を離れては幸福も進歩もない。それ所か生きて行けない筈だ。それであるのに何故かくも、労働は厭やなものであらうか、苦痛は労働の本質なのであらうか、それとも神経の致す所であらうか、或は他に理由のあることでもあらうか、一種の労働研究所が、私の頭の中に開設されたやうな譯であつた。

それから以後、有らゆる方角から考へてみたが、何よりも先づ楽しんで働いて見ようと努めたが駄目だ。依然として苦痛であり、いやであつた。併し日本からの純労働者達は、案外平氣であつた。これは彼等は、幼少から労働に慣れ、その上筋肉労働による以外に、生活の方法なしと觀念してゐる所から、労働苦痛感が比較的少いことが分つた。

社會は進歩する。労働時間は労働者の覺醒に伴れて、短縮の道程を辿つた。工場は十時間から九時間、八時間となり遂には、土曜半休制さへ現はれるに至つた。而して文化の訪れることの遅い農園にまでも、九時間労働制が波及した。更に賃銀は、時間の短縮せし以上に躍騰した。労働

者は欣喜雀躍したが、雇傭主側は青くなつた。併しそれは杞憂に過ぎなかつた。時間短縮、賃銀高騰は却つて、労働者の素質を良化し、労働質を向上し、續出する機械の發明と相待つて産業の旺盛を來たし、米國は堯舜時代を超越して、地上の天國となつた。

だが、しかし吾々労働者には、天國といふには遠かつた。労働時間は農園に於て九時間工場八時間、所によつてはそれ以下に降つたが、労働は依然として苦痛であり、いやなものであつた。

獨立労働時代

私は長年の經驗によつて、被傭労働に關する限り、如何に時間が短縮されても、多少の苦痛感、嫌厭感の免れないことを知つた。また人にもよらうが、ルンペンに背越の金を持たずで、日傭労働をしてをつては、何年たつても獨立の出來さうもないので、旁々私は、被傭労働から獨自労働の農業へ轉向したのであつた。

無理に初めた百姓だから、手と足とが資本の全部と云ひたい程であつた。だから身體の續く限り働かなければならなかつた。水掛と收穫時は、眞に不眠不休であつた。にも拘らず失敗又失敗

で、残るものは借金のみで、そして疲勞はルンペン時代の比でなかつた。多忙時が一先づ終ると、疲勞の種三十時間も打通して睡つた事が、よくあつたものだ。かほどまで激しい労働苦であり乍ら、不思議にも被傭労働に於けるが如き嫌厭感（けんえんかん）は起らなかつた。それ所か、閑散期（かんさんき）に入ると無聊に堪へず、却つて悪戦苦闘の多忙時が慕はれたのであつた。

私は此等の體驗に依つて、如何なる労働も度を過ぎては、儘に苦痛となるが、併し労働の種類によつては、過勞も左程苦痛とならず、なつても嫌厭の情が起らず、起つても堪へ難いものではないことを知つた。

理屈からいへば、長く激しく働く程苦痛を増し、嫌厭の情も高まる譯だが、併し獨自労働の場合、忿の皮の突張っているせいか、之を賃銀労働に較ぶれば、疲勞は激しかつたが、嫌厭感（けんえんかん）は起らなかつた。そこで、労働嫌厭感の稀薄なる、この獨立労働心理を、被傭労働に及ぼせぬものか何うか、これが新かに起つた問題であつた。

私は失敗に屈せず尙も百姓を繼續しつつあつたが、労働運動は益々激化の一方、時間短縮、賃銀増加、待遇改善の聲は、怒濤の如き勢で、農村にも押寄せて來た。被傭労働者に多大の同情を

有つ私も、これには迷惑せざるを得なかつた。しかし、機械に引摺られて働く工場と違つて、農園労働は、働き様の如何に依つて労働時間が多少短縮されても、大した影響はないが、賃銀の躍騰するには、水呑百姓として閉口の他なかつた。

幸にも景氣の神は農園を見捨てはしなかつた。お蔭で私のやうなものまでが、農具を手にしなくも、よいやうになつた。この餘裕は私の研究慾を唆り、八九時間労働は既に試験済みであるから、更に晝夜四分説即ち、六時間労働の可能か不可能か、取敢へず自身之を試みることにした。そこで私は、使用人と場所を異にし、午前三時間、午後三時間都合六時間、懶けず急がず、注意深く、時には煙草も喫み、時には鋤鉞を杖として四五分間の佇立休息をとりつつ働いたが、その結果の好良なる、まことに豫想外であつた。加ふるに傍生の利益を數ふるならば、農具馬匹が丁寧に取扱はれること、働きに落ちのない事、疲勞の少いこと、従つて精神の平正状態が保てる事、而して疲勞少く精神の平正なるは、やがて明日の労働を完璧ならしめる事等の利益を考ふる時、六時間労働は八時間及び以上の労働に比して優るも劣らざるを知り得て、私は手の舞ひ足の踏む所を知らなかつた。

前述の六時間労働に於ても、多少の疲労は免れぬ。併し大概は其日の中に回復されて、翌日に持越す量は極めて少い。而して日毎に積る疲労は、週休即ち日曜の休養によつて、殆ど除去される。であるから、六時間労働中は、必身常に軽快であり、労働嫌悪の念起らず、本を讀んで呑込み易く、温容を以て人に接することが出来るやうになつた。茲に於て私は、労働の本態、必ずしも勞苦そのものでないことを、初て知つたのであつた。併しこれは、私の獨自労働に試みた結論で、被傭労働の場合にも、果してさうであるか、どうかは尙疑問として、これは、またの機會に待つことにした。

六時間被傭労働

西曆一九一七年私は三名の日本人労働者を、八九十の三ヶ月は六時間労働、その後は通常労働時間と云ふ約束で雇入れた。なぜ八九十の三ヶ月を六時間にしたかと云へば、いふまでもなく六時間被傭労働試験のためであるが、一つは此の地は有名な酷熱盆地で、給料の二倍も出さなければ、働くものがなかつたからである。

三名の労働者は、書生上りの青年であつた、彼等は私の六時間労働説を面白いとして、好奇的に働いて見る氣になつたのである。私は一切を彼等に託して、海岸地方に出掛け、五週間ばかりして歸つたが、その成績は豫想外好良であつたから、彼等は遠慮して六時間餘働きはしまいか、または大馬力を掛けて働いたのではないか、と疑はざるを得ざる程であつた。その上馬匹の手入、農具の始末申分なく、周囲の掃除行届き、きたない申分だが不在中に於ける食料等も、案外僅少であつた。此等間接の利益を加算する時、それは八時間労働に比較して、優るとも劣るものでなかつた。更に六時間労働に對する彼等の感想を叩けば、前述の私のそれと全く一致するものであつた。これでは、六時間労働のいよいよ可能なるを信じるやうになつたのである。

序にいふが、農業その他の野外労働は、如何様にも労働者自身の手加減が利くので、六時間労働といひ、八時間労働と云つても結果に於て大して差等の生じ來るものでない。労働者が眞面目に能率的に働けば、六時間労働でも、普通労働の八時間乃至以上の仕事が出来たものだ。又それと反對の場合には、十時間労働も、眞面目な六時間労働には、遠く及ばないものである。

だから野外労働に於ては、長時間労働を強制して見た所で、必ずしも得策とはならないもの

だ。併し狭い場所で、監視の行届く、例へば機械に引摺られて働く工場などに於ては、長く働かせる程利益だが、併し不景氣など特殊の事情のために、時間を延長し、賃金を低下するは致方ないが、胴慾に驅られ、労働者の無力に乗じて、徒らに長時間を強要するは、人道上宥さるべきでなく、かつ又、いづれの點より考察しても、得る所失ふ所を償ひ得るものでないと思ふ。

それは兎も角、労働は決して苦痛、不快なるものでなく、労働苦は労働時間の過長、法外なる激働、労働條件の不合理、或は又被働労働に特有なる、神経作用のいたづらから來るもので、孰れかといへば労働は、淡泊無味と云ふより寧ろ爽快であり、而して労働に渴するの心——疲れな、潑刺たる心身を以つて働くならば、労働効果は却つて多く、そして労働の神聖味に、しみく觸れることが出来ることを知つたのである。

これは、私が三十有餘年に亘る筋肉労働に依つて得た所の、唯一の報酬である。朝に道を聞き夕に死するも可なり。私はこれで大に満足したのである。

一一 労働時間

労働時間算出の標準

人生とは労働、休養、睡眠の交代繼續する間の生活状態を云ふ。而してよく働き、よく休養し、よく睡眠することが、最も意義ある人生なのである。よく働くとは、過不足なく働くことであり、よく休養するとは、過不足なく休養すること、よく睡眠するとは、過不足なく睡眠することである。

それには、働、休、眠の三者をして、均衡その宜しきを得せしめねばならぬ。いづれが過多或は過少であつても人生は、病的となる例へば、労働過多なれば必ず休眠いづれかに過少を來たし、休養長きに過ぐれば、働眠いづれかに過少を來たすやうなものだ。されば労働時間算出の標準は働休眠三者の均衡を破らない所に置かなければならぬ。

然るに従來労働時間算出の標準は、どこに置かれたかと云ふに、主として仕事の都合の上に置

き、健康などは左程顧慮されないやうであつた。仕事のみを見て人を見なかつたのである。過度的現象として已むを得なかつたとしても、これでは、合理的労働時間を見出すなど、思ひもよらぬことである。

しかし、實際問題として労働時間の決定は、働休眠の均衡を目標としてよりも、文化の程度、氣候の關係、物資の多寡の如何に依つて支配されるものである。即ち機械の、發達した所や、必需品の容易に得られる國では、長時間労働の必要なく、然らざる場合は、何としても長く激しく働かなければならないのである。とはいひ、これは變則であつて原則ではない、原則は何うしても働休眠三者の均衡を目標とするところになければならぬ。而してこの原則は、大抵の國に於てなら行はれ得る筈である。

休養とは、單なる休息の意味でなく、休息の外娛樂、修養、雜務を含む。雜務とは私用のこと、修養は云ふまでもなく知徳を研ぐことだ。私用の必須なるは云ふまでもないが、人の一生を通じて修養も亦必要である。人は幾歳になりても、何かに就き常に研究し學習し修養しつづつあるものだ。それだから人間に、進歩があるのであらう。この意味で世間は大學校であり、人は萬年

學生である。

八時間労働は理想か

八時間労働説は、思ふに晝夜三分説に發生したものであらう。即ち一晝夜を三分する時は、丁度八時間宛となり、休養睡眠各八時間あれば充分らしく、労働も亦一日八時間やれば、大抵の時代、大抵の國に於て一身一家の生計が立ちさうであり、晝夜三分説は如何にも自然の指示らしいといふのであらう。確かに面白い見方である。併し八時間労働説は、科學的研究の餘になつたものでないにしても、一方に偏倚せず、働休眠の三者を一樣に重視せし所、即ち均衡を得せしめる所に、無限の重要味がある。

八時間労働説の出現は、被働労働者には渡りに舟の福音であつた。鈍重なる彼等も、救ひの神として之を採用するに躊躇する筈がない。併し理想はおいそれと實現するものでない。惡戰苦闘は續けられた。今も尙續けられつつある所が多い。現状より考察すれば、あまり遠くない將來に於て、八時間労働は世界的に實施せられるであらう。又さうなくてはならないのである。

併し世間でいふ八時間労働説は、人類の到達すべき最後の理想労働時間であらうか。私には疑ひなきを得ないのである。世間の所謂八時間労働とは被傭労働の場合の定業労働時間を云ふのであらう。とすればそれは、其人の一日に於ける總労働でないから、晝夜三分説と合致しなくなる。何故なら、何人にも定業以外、退引ならぬ種々雑多の私用があるからだ。即ちその雑務労働を定業労働に加へれば、人によつて多少の差は免れないが、恐らく平均して一日十時間内外の労働とならう。これでは一方偏倚となり、三者の均衡が破れる。そこで私は、定業六時間労働の合理にして、且實行可能なるを主張するものである。

六時間労働

人にして雑用のないものはない。雑用は手離すことの出来ない用務である。炊事、洗濯、衣類器具家屋の修理、掃除、交際、買物、公用等皆退引ならぬ用務である。而かして此雑用は、定業労働ではないが、労働に相違なく、娯楽でも休息でもない。されば雑用労働を無視して、眞の合理的、労働時間を見出さうとするは無理だ。晝夜三分説による八時間労働は、雑務労働を除外し

ての労働でなく、一切の労働を含めての労働でなければならぬ。でないとするれば、それは定業労働八時間と云ふことで、本當の意味の八時間労働ではない。

労働者が、労働時間の短縮を欲する理由の一是、定業労働が長くては、雑用達が出来ないといふのだ。最も至極の言分である。しかし雑務労働に要する時間は、平均一人一日二時間位であらう。過少であつても過大ではない。

私の働き初め頃の労働時間は、十時乃至十二時間であつた。だから終働後一服すれば、手紙を書く暇もない位だつた。あつても疲れて書く勇氣がなかつた。己むを得ず雑用は、日曜や祭日にやつたものだ。吾々にとりて日曜や祭日は、休む日、遊ぶ日でなく雑務労働日であつた。か様な次第で、當時の吾々には、休養の出来る休養日はなかつた。我々は全く物言ふ労働機械に過ぎなかつた。願みて、ぞつとするのである。

定業六時間労働なら、日曜や祭日に働かなくも、何うか斯うか雑用はたせようが、しかし定業労働を八時間とすれば、雑用を加へると、實際は九時間或はより以上の労働となる。これでは休養、睡眠との釣合が破れ、爲に人生の不幸を見るやうになる。そこで私の考へ附いたのは、定業勞

働六時間、雑務労働二時間合はせて、名實兼備の八時間労働である。これなら、働休眠各八時間となりて夜三分説とびつたり合致する。私は何も物好きに、晝夜三分説を主張するものでない。體験上、合理にして實行可能と思ふからである。

といつて、即時断行を主張するものではない。國により、局部的に實行可能の所あり、また、實行してゐる所もあるが、全般的に見て世界の労働機構は、未だそこまで發達してない。また労働者の素質如何も吟味されねばならぬ。休養時間を正用し得ないやうな労働者に、労働時間の短縮は却つて禍害を齎すからだ。

八時間睡眠説には、何人も異存はあるまい。過不足のない程よい所だ、といふ感じか、おのづと涌き来るであらう。これは本能的測定といふ奴で、冬來れば寒くなる、と同様の確實性を持つ。併し休養八時間説には、文句があるやうだ、労働者には長過ぎると云ふ説である。だが、これは露骨にいへば、わからず屋の囁語でなければ、人の苦痛は三年でも待たう、といふ型の人の考へである。

人は物質生活以外精神生活も必要だ。向鉢巻の労働者も人だ。多少に拘らず精神生活の必要を

感じないものはない。感じないものがあつたら、それは無いのでなく未だ知らないのである。知らない者があつたら、社會は之を啓發してやらねばならぬ。

讀書は精神生活に絶対必要だ。その日暮しの労働者も、新聞紙は讀まねばならぬ。寧ろ社會の一員として讀む義務ありと云ひたい位だ。所が、其日の新聞を精讀するには、少くも一時間はかかる、況や一二の雑誌、パンフレットにも觸目する必要あり、時に講演を聴き、展覽會をも觀ねばならないとすれば、修養時間として少くも、平均一日二時間は見積らねばなるまい。休養八時間から修養二時間と、前述の雑用二時間都合四時間を、差引けば、残る所たつた四時間である。これが自由時間で、休息、雑談、碁將棋、活動、寄席、勉學等勝手次第である。して見れば八時間休養は、決して長いとは云へないのである。

疲勞堆積

疲勞なしに労働は出来ない。疲勞堆積は毒だ。しかし疲勞も程度次第だ。翌日まで回復される程度の疲勞なら、寧ろ藥であらう。といつて油断は大敵だ。少量の疲勞も積れば山となるから

だ。

多くの人間は、疲勞を堆積しつつ働いてゐる。そしてそれが、勤勞の徳として賞讃される。従つて多く働き、多く苦む個人、國民、種族程幸ひであると云ひ傳へられて來た。又さうでもあつた。しかし、過勞は怠惰よりもましであるの意で、永久を貫く眞理ではない。人間の智力は人間をして必ずや、疲勞を堆積させぬ範圍に於て、理想的文化生活をなさしめる。安樂生活は人心を腐敗せしめると云ふが、それは科學の發達しない過去のことだ。個人としても國民としても、進んでゐるもの程、最少の勞力を以つて、最大の効果を擧げつつあるに見ても分ることだ。

能率の多少は、労働時間の長短に準ず、との思想は古來、労働學上の鐵則として認められて來た。労働に一日の長ある歐米人すら、今猶この思想に未練を残してゐる。だが、この思想は、労働者を牛馬視、機械視する所に出發した淺基な考ひである。人間の勞力に限度がある。限度を無視した無茶な労働に、能率の上がる筈がない。

實地に働いてみると、週初の月曜日と週末の土曜日とは、心身の狀態に大なる開きがある。週初の月曜は、昨日曜の休養によつて疲勞がとれてゐるから、心身共に輕快、作業も愉快に能率

的に運ぶのであるが、週末に近くに從ひ、心身次第に疲勞し、倦怠より苦痛氣味となり、速力鈍り、注意力減じ、仕事に過失を來たし易くなる。これは萬人周知の事實だ。

何ういふ譯で斯うなるのか、といへば、その日の疲勞は其日に回復されず、その殘餘の疲勞は日毎に堆積して週末に至りて其頂點に達するが故である。週初に於けるやうな輕快な氣持と體力が持続されるならば、週末も週初と同様に働ける筈である。此所だ疲勞を堆積していけないと云ふは、疲勞は病である。疲勞を堆積する所、富は反對に減退する。少くも増進しない。

日曜休養は結構なる制度である。六日働けば、少くも一日の休養は必要だ。休みなしに働けないことはないが、本當の働きとはならない。釋迦や基督であつても、矢張り同じであらう。神ですら六日働いて、一日安息したと云ふではないか。況んやか弱い人間だ。一週一日の休養なしに働けるものでなう。

疲勞の堆積するに從ひ、次第に勞働力の衰ひ行くは、無心の動物も同様だ。一日八九時間の馬耕をやつてご覧。如何に滋養物を與へても、馬は次第に瘠せ衰へ行く。能力もそれに準じて減退する。もしも日曜の休息を與へず、一ヶ月も打通して使役するものなら、三歳位の幼馬だと、回復

不可能に至るまで、その身體を損傷し、疲馬として一生を終らすことになる。日本に於て特別働き過ぎる地方の農民が、矮小且短命なるは、この理に他ならない。労働に熱心なれ、しかし疲勞を堆積してはならない。

年齢、體質と労働時間

八時間労働といひ、又或は六時間労働といひ、それは中年労働者を目標として算出されたもので、老、少年者は之に與らない。併し公定労働時間は、強弱の差別なく、一切の労働者に對して行はれてゐる。少くも黙認の状態にある。而して此傾向は、準文明國以下の國に於て甚しい。已むを得ざる事情のあるにせよ、不合理至極である。

元來労働時間は各個人の年齢、體質に依つて定めらるべきものだ。年齢、體質の變化によつて、働休眠の釣合が變つて來るからである。例へば幼者は澤山の睡眠を要し、老人は、多くの休養を必要とするやうなものだ。併し現今の社會状態で、この理想を遺憾なく實現せしむることは、むづかしいに相違ない。併し出來るだけ行ふことだ。そして全幅の實現まで行かねばならな

い。而してそれは出來る出來ないの問題でなく、爲す爲さぬの問題である。

以上は、専ら筋肉労働を對象として老へられたものであるから、そのまま之を精神労働に適用するは無理だ。

云ふまでもなく精神労働にも疲勞はある。従つて休養なしに働く譯に行かない。しかし純粹の精神労働になると、大に違つて來る。疲勞は免れないが、時間に制限はない。性質上制限しようにも出來ないのだ。自由放任の外ないのである。即ち書齋、研究室は勿論、歩行中でも對談中も彼等の頭腦は、思索研究に向つて絶えず働いてゐるからだ。だがその割合に疲勞はない。疲勞なしと云ひたい位だ。しかし、思索的に行詰ることがある。この時だ、外間に疲勞らしく映ずるのは。しかし、行詰であつて疲勞でも、疲勞を癒さんための休息でもない。

この様に純粹な精神労働と筋肉労働とは、其性質に於て大分違ふものがある。故に労働時間に關する限り、筋肉労働に對する筆法を以つて、精神労働を律することは出來ない。

精神的疲勞は散歩その他一寸とした心機轉換、或は人工的操作によつて、容易に回復し得るが、筋肉的疲勞は、さうは行かない。それ等の方法も儘に一助たるに相違ないが、何としても根

本策としては、充分なる休養による外はない。

頭脳は使ふほど良くなり、身體は使ふほど衰へる。休養時間は、筋肉労働者ほど長きを要する。

一一一 時休、週休、月休、年休

過勞讚美の誤謬

北方の聖人は、勞苦(勞働過度の意)を美德として教へたやうだが、勞苦を勞働の本質と思惟してのことかと云へば、さうではないやうで、さう教へざるを得なかつたのであらう。北方の寒國は物資缺乏し易く、その上當時の大衆に、ともすれば懶惰に流れる惧れがあつたからであらう。これと反對に宗教には、貧乏禮讚の傾向があるやうだ。考ふれば其所に、さう云ふ傾向となつて然るべき理由があるやうだ。なぜなら、宗教といへば殆んど南方熱國の所産であるが、熱國は比較的物資豊富であり、それに住民の消化器鈍く、被服多きを要せず、家屋も茅屋、土窟で澤山

だ。従つて北方寒國よりも、生活は樂な筈である。これ熱帶地の聖人は、環境の影響で、語弊があるが、貧乏禮讚の傾向となつたものであらう。貧乏禮讚は取りも直さず、勞働否定、遊食獎勵に墮し易い。私としては、どつちの教にも感服しない。

そは兎も角、どうしたら苦痛を感せず、愉快に働くことが出来るかと云へば、其日の疲勞を翌日に、其週の疲勞を翌週に、其月の疲勞を翌月に、其年の疲勞を翌年に、それ／＼持越さないやうにすることだ。さうするには勞働時間、勞働日数を程良く制限すること、換言すれば合理的なる勞働時間、時休、週休、月休、年休を設定する、それ以外に方法はない。

時休

時休とは、一時間毎の小休で、いはば煙草時間である。約五分乃至十分を限度として、この間喫煙、小用、休息勝手である。

長い或はむづかしい仕事には、特にこの小刻みの時休が必要である。それは勞働を滞りなく繼續せしむるため、氣分に刷新を與へるためである。

時休を與へまいとしても、それは殆んど不可能だ。労働者は何とかして閑暇を偷むものだ。寧ろ公然之を與へる方が、どれ程賢明、得益であるか知れない。

云ふまでもなく、或仕事には時休不可能のことあり、又いかな老猶なる労働者でも、閑暇の偷めない仕事もある。

週休

週休とは、毎週に於ける休日のことだ。今の日曜休日制がそれだ。併し週休日は、日曜日とは限らず、又日数も、必ずしも一日と限らるべきでない。仕事の性質によつては、三日乃至四日毎の休日が必要であらう。地底労働などは、週休二日は必要だらう。でなければ、労働時間を短縮せねばならぬ。

米國の自動車王フォードは、恐らく週休二日制の鼻祖であらう。しかも八時間労働であるから、一週四十時間の労働だ。本書の所謂六時間労働即ち三十六時を超過する僅に四時間である。何故の二日休養制か。それは一日を雜用労働に、一日を眞の休養に振當てたものであらう。果し

て然らば千古の卓見である。フォードが、自家製作の自動車を、従業員に賣込む魂膽のあつたことも、彼の自白で明かだが、これは副因であつて主因ではないと思ふ。

月休

月休とは週休以外に、毎月連続的に三四日の休養制を設けることだ。

十時間以上の定業労働なら勿論の事、六七時間のそれに於ても、其日の疲勞は其日の中に完全に回復されず、殘餘の疲勞は、日一日と堆積し行くものだ。これは出鱈目でなく、全くの事實である。労働者が日曜休日や祝祭日を、一日千秋の思ひで待つのは、單なる遊び心から許りでなく、疲勞を癒さんがための退引ならぬ自然の要求である。

さて日曜の休日は來たが、六日の労働で疲れてゐるから、誰しも朝寝をする。朝食を終へて新聞に眼をさらせば、もう正午だ。労働者は雜用が多い。出稼人やルンペンだと、洗濯から針仕事まで自分で爲さねばならぬ。さうこうしてゐる中に、はや日没だ。冗談の一つも喋れば、明日の仕事が思はれて就寝となる。人は労働の動物なり。とは云ふものの、これでは餘りに酷い。こん

な不都合が宥されて堪つたものでない。それに人には、二三日乃至三四日位の連続的休日を要する用務の出来するものだ。かたゞ月休制度の必要があるのである。

といつたら、青くなる雇傭主がないとも限らないが、毎月三四日の給金附休養を與へた所で、合理的休養は却つて、労働力の涵養と、労働心の刷新を意味するから、雇傭主にとりて喜ぶべきも、悲むべき結果とはならない。

私の月休説は、一週一日休養の上に樹てたものである。であるから、一週二日休養制の所には、月休設定の必要が無くなる、少くも其必要性は大に減少する筈である。

そこで考へねばならないことは、一週二日の休養は、月に八日の定休日となり、一週一日休養、月休三四日としても、矢張り月に七八日の定休日となり、いづれにしてもその日數に變りはない。問題は二つの中、どつちがよいかといふことである。且として後者即ち月休制の方をとりたいのである。何となれば前述の如く、人には三四日を要する雑務が少くないからだ。

因みに云ふ、一九三五年六月國際労働會議全員會議は、一週四十時間労働制を、七十九票對三十票の多數を以つて可決した。四十時間労働制は必ずしも、一週二日休養を意味するものではないが、單に休養時間の上から云へば、六時間労働、月休設定説に近くなつて來てゐる。

年 休

年休とは、一年に於ける大休日のことだ。年休日數は、一ヶ月を理想とするが、少くも二週間は必要だ。時期は年末年始の間がよい様に思ふが、必ずしもさうと限らない。また年休を二分して半歲毎にしてもよい。要するに年休の時期その他のことは、國情を參酌して適宜制定すべきものである。

年休は、労働者の一年に於ける大清算日である。素人に出来る大修繕、勉學、調査、或は成人學校、修養道場の参加、親戚知人の訪問、避暑(労働者ほど避暑の必要あり)國內及び隣接諸國の見學(日本でいへば、せめて朝鮮、臺灣、滿洲、樺太、浦鹽、上海位は見學したい)等である。それには少くも二週間は要る。年休は、そこを狙つたものである。

かく云へば、それは、労働者には贅澤であり、不必要であり、それ以上不可能でありとして、一蹴し去る人もあらうが、それは、労働者を萬年奴僕視する者の暴言で、君子人には考へ及ばな

いことだ。

米國邊の労働者を見よ。苦力階級から見れば、殆んど王侯の生活をなしてゐるではないか。百姓や職人で自動車、ピアノ、裁縫機を持たないものはない位だ。甚しきは自動車で乞食するものさへある。私の知る限りで米國の百姓は、妻子携帯、毎年或は兩三年毎に、閑散期を利用して旅行或は避暑避寒するが常だ。

年休は、昨今の發見でなく、昔からあつたことだ。日本に於ける盆、暮の三四日乃至七八日間の休暇がそれだ、明治以來のことで、西洋に真似たのかも知れないが、我國官吏社會の夏期休暇或は半日勤務もそれだ。

英國に於て現代的意味の年休は、部分的にはあらうが、可なり以前から行はれたらしく、相當の工場、商店などでは毎年、或は兩三年毎に、二三週間の年休を従業員に與へて來た。これは、労働者のご氣味取でも、又強制されてでもなく——最初はさうであつたかも知れないが——今は殆んど常識化してゐる。

年休制は歐洲大戰後、急激なる進化を見た秘魯、スペインは一切の労働者——知識労働者をも

含む——に、有給附七日乃至十四日間の年休制を規定した。ユーゴスラビアは、俸給生活者に、勤続六ヶ月毎に、十日間の有給半年休を、また、ラトヴィキア國は、賃銀、俸給労働者に、六ヶ月毎給金附十四日間の半年休を與ふと、いづれも規定した。一年にすれば年休日数は、前者は二十日間で、後者は二十八日間となる。随分思ひ切つたものだ。

日本の文化は不揃である。或ものは歐米丈、或ものは歐米以上進歩してゐるかと思へば、或ものは未だ半開時代を脱しない。例へば官界、學校、銀行等を除けば、週休制すら未だ行はれてゐない。日本のやうな雨の多い國の野外労働に、規則立つた週休制を行ふことは無理だが、屋内労働には行へる筈だ。にも拘らず、何とか理屈を付けて行ふとしない。使ふ者も使はれる者も、週休なしで平氣だ。その方が能率的と思つてゐるらしい。愚の骨頂である。月休、年休は、我慢するとしても、せめて週休だけは即時行つて貰いたいものである。労働者に對して、無暗に、休日の少きを望むは、一文呑みの百知らずである。

除外例

一二 時休、週休、月休、年休

労働時間を詮議するに當り、特に注意しなければならぬことは、労働者が休養時間を正用するや否やである。休養時間を正用し得ない——悪用或は徒費する労働者に、長い休養時間を與ふることは、労働者の利とならず却つて害となるからだ。この種の低級労働者は、疲勞を回復する以上の休養時間を、要求する資格の全然缺如せるものである。また、與ふべきでない。

休養とは、よく休み、よく樂み、よく修養することだ。だから割合長い休養時間が必要となるのだが、單に疲勞を癒すだけなら、八時間の睡眠で、ほぼ目的が達せられるから、睡眠時間以外、九時間、十時間といふやうな休養時間の必要はない譯である。況んや休養時間を食つたり、飲んだり、打つたりすることに悪用するのなら、休養時間は寧ろ無きを可とする。人心の腐敗は、多く閑暇の時に醸される。絶えず働いてをれば、働きに忙殺されて、悪い考を起したり、悪い事に感染する暇がなく、あつても實行に移す隙がない。休養時間を正用し能はざるは、取りも直さず、長い休養時間の必要なしと云ふことだ。

一三 機械は労働の主體

文明人と労働時間

原則として八時間労働は、國際的に認められた。だが、頭數からいへば人類の大多數は、今猶長時間労働に苦んでゐる。日本もその仲間である。

さうかと思ふと或所に於ては、六時間労働も微臭くなりかけてゐる所もある、本書の理想と大同小異なる年休制の行はれてる所もある。そして六時間労働——三十六時間労働に至らないまでも、それに近い四十時間労働制を實施してゐる會社、官廳は、文明國間にはざらにある。近くは又、國際労働會議は四十時間労働を可決した。

敬服に堪へないのは白耳義で、労働年報によれば、同國の平均労働時間は、四十時間と少し餘とある。大したものだ。また、一時的かは知らないが米國では、聯邦道路建設請負は、一週三十三時間を超ゆ可らずとある。一週六日、一日五時間労働である。機械が道路工事の殆んど全部を受

持つ米國に於て、道路開墾労働を三十時間以内に限定しても、經濟上可能なる許りでなく、半沙漢性を有する西南諸州に於て、しかも日中百十度を上下する炙天下に於て、道路開墾に八時間労働は殺人的である。強制しても労働者は働かない、否、働けないのである。斯ういふ譯であるから、三十時間を超ゆべからずの規定は、恐らく失業緩和の一次的政策ではあるまい。よしんば、さうであるとしても、これを機縁として結局は、永久性的原則となるであらう。

とは云ひ、流行に釣られて無暗と、労働時間の短縮に熱狂するは愚だ。瑞西のやうな工業國が、意外にも工場、店舗其他の労働時間を、一週五十五時間、土曜日半休としてゐる。そこには種々事情あつてのことだらうが、亦は兎も角労働運動の熾烈なる西歐の眞ん中で、泰然自若十時間労働制を頑守し、労働者側にも大した反對のない所に、瑞西労働者の偉大さと、労働時間も國情に即して、制定さるべきであることが首肯される。

労働の機械化

左右前後を顧みず、無暗に労働時間の短縮を迫るの愚なるは、既に述べた。

労働時間を短縮して餓死するではいけない。幸福を得んが爲の労働時間短縮である。されば、労働時間短縮、報酬減少でなく、労働時間短縮、報酬増大でなければならぬ。むづかしい注文だ、併し可能である。

何うすればよいか、益々科學を振興し、生産機構を機械化することである。簡単にいへば機械を労働の主體たらしめることだ。今まで百人の勞力を要した仕事を、四五人でやれる機械が發明されたとしたら、否應なしに勞力の必要が減少する。それだけ労働時間が短縮され、労働苦も除去されるが、生産率は却つて増大する。

目まぐるしい勢を以つて、工業の機械化されつつあることは、その邊の工場に行つて見ても分ることだが、農業の機械化に至つては、日本人の多數は、未だよく知つてないやうだ。今茲に二三の實例を挙げ、如何に外國に於て農業が機械化されつつあるかを示さう。

日本では耕地に、千年一日今猶手鋤を用ゐてゐるが、これでは、不攝生的な姿勢を以つて苦痛と戦ひ乍ら、一日中努力して、やつと猫額大の面積しか鋤けない。所がトラクター鋤だと、一人一晝夜、十四五町歩から二十町歩は鋤ける。これなら労働時間は、否應なしに短縮される筈だ。

米國は何から何まで機械化されてゐる。棉花耕作には、莫大な人手を要したものが、今は耕耘、播種から驅蟲、摘花、除實、造俵運搬等、一切機械が代働する。人間の勞力は、昔の千分の一も要らない。もう一つ實例を示せば、搾乳機械である。搾乳から乳牛の洗滌等、一切機械でやる。労働の主體は機械で、人間は、その補助者たるに過ぎない。

田舎者が一年置きに東京に出ると、東京の機械化に驚くといふが、東京の文化人が、一兩年毎に渡米すると、米國の超人的機械化に驚くと云ふことだ。上には上のあるものだ。

排日の本場米國の加州は、面積は約日本ほどあるが、人口は僅に五百萬、しかも、その五分の四は、市街に偏集してゐる。それで、田園遠く開け、菓實と蔬菜の大農業國であるが、どうして、この僅な人數を以つて、あれほどの開拓をしたかと云へば、他なし、盛んに代働機械を利用したからだ。

如何に死物狂ひの奮闘を以つてしても、むかし乍らの鋏鎌斧鋸程度の器具で、加州をあれだけ開拓するには、少くも二千萬乃至二千五百萬位の人口を要するであらう。それが、しかも日本人、支那人を加へた、たつた五百萬人で、立派な自治州を造上げたのだから、機械の力は恐ろしい

ものである。

日本も工業は機械化されつつあるが、農業その他の方面は、未だしである。猫額大の田畝に、米國流の大農機械は向かないが、併し大農機械があれば小農機械もなければならぬ筈だ。少し考へたら小農用小型トラクター位は發明されさうなものだ。これが發明されるれば耕耘に、播種收穫に、大に勞力を省くことが出来る。星を戴いて出で、月を踏んで歸るの愚を續ける必要がなくなる。模倣と直輸入にのみ夢中にならず、日本在來のものにも、發明、改良を加へて貰いた

50
労働時間の短縮を欲するならば、何としても機械をして労働の主體たらしめる外ない。原始的器具時代を脱せず、無暗に労働時間を短縮しようとしても、それは人力車で、自動車と競争しようとすると同じで、出来ない相談である。

一四 テクノクラシー

夢物語ではない

テクノクラットの言ふ所によれば、テクノクラシーを實行すれば、北米大陸に於て二十五歳より四十五歳までの成人が、一年の中六百六十時間、即ち毎日二時間餘働けば、一家當り年二萬弗に値ひする生活品を分配する事が出来る。そして生活品餘りあつて、しかも食へないと云ふ馬鹿氣た不況時代は、永久に起らないと云ふ。あまり甘ま過ぎるから夢物語かと思へば、さうでもないらしい。破天荒の新説だから、多少の誤算や考違は免れないとしても、颯筆から駒の飛出したやうなものでなく、多少共事實に根據してゐる所に、捨て難い所がある。

テクノクラシーとは、機械化された國家、政治家や經濟家の代りに、技師に依つて支配される國と云ふことだ。而して米國は、テクノクラシーの瞻立は出來てゐるが、國民が坐つて箸をとるか、どうか、そこが唯一の問題であると云ふのだ。

新説に反對は附物である。反對あるが故に、過ぎたるは削られ、及ばざるは補はれ、誤りは正されて完全へと導かれるものだ。反對は新説を玉成する。

テクノクラシーが夢物語であつても、なくても。即時實行し得られるものでないことは云ふま

でもない。假りに實行し得られるとしても、私にはその得失是非は疑問である。と云ふはたつた二時間の労働で、人間の労働慾が充たされるか、どうかと云ふことが疑問であり、假りに充たされないものとするれば、結局破棄されることになるからである。

二時間労働は過少

二十五歳から四十五歳までの成年者が、毎日平均約二時間働けば、殘餘の人は遊んで食つて行けると云ふことなら、私のやうな貧乏人には、開いた口に牡丹餅だが、併し早歡びは考物だ。と云ふは、たつた二時間の労働、しかも、それが壯年者に限られるとすれば、二時間でも働ける人は幸福だが、他の労働力の未だ失せない人は、何うするのか。無爲遊食に不平がないだらうか。私には、さうは思へないのである。

人は成るべく休みたい、働きたくないと云ふ。この傾向は、其日暮しの労働者に、一層激しいやうだ。此點から見れば、成るべき働くまい、休みたいと云ふのが、人間の本性らしいが、愚考によれば、これは、労働の過度と報酬の過少とから來たる反動的心理であつて、人間の本性では

ないのである。

労働は人の生命である。労働の否定は、取りも直さず生存の否定である。人間は労働を避けんとするものでなく、労働を逐ふものである。人の労働を嫌悪するは、労働その物ではなく、その過度を嫌ふのである。此観点からするも、將た私共労働者の體験上よりするも、一日僅々二時間餘の労働で、人間の労働慾は到底満たされるものでない。

のみならず、この二時間餘の労働の幾分か、二十五歳未満の青少年、四十五歳以上の未だ労働力の衰へない年長者に割愛せねばならぬことにでもなれば、一人當の労働時間は益々少くなつて、殆んど無労働時代、働くものは機械だけと云ふやうな世の中になるだらう。便利も此所まで來ては、もはや人間の末路といはねばならない。

代働機械の發達は必要である。さればと云つて、人間の労働力を不用にするまでの機械化は行過ぎであり、頭腦の亂用である。最新の機械を据えた製紙工場には、殆んど人を見ない。機械が一切をやつてゐる。凡てが斯うなつては、堪つたものでない。また、さうなる可能性がある。何事も過不及のない所でなければ、眞の幸福のあるものでない。機械化と云つても、人間の労働力を満足せしむる限りに於てでなければならぬ。

無爲ほど辛いものはない

世の中に何が一番辛いといつても、恐らく無爲徒食ほど辛いものはあるまい。

過度労働の苦痛なるは云ふまでもないが、暖衣飽食毎日爲すことなく、ぼんやりしてゐる事は、尙一層苦痛である。過度労働の苦痛なるは、一般に知られてゐるが、無爲生活の苦痛に至つては、案外知る人が少いやうである。悪戦苦闘當時は何人も、その労働苦より脱却せんともがくが、一旦閑散になると、衣食が充分であればある程、却つて往時の多忙時代が慕はれるものだ。それと云ふも所詮人間は労働の動物であるからだ。

罪人を懲戒する最良の方法は、苦役を課すよりも、出来ることなら獨房監禁に限る。絶對無動生活を強制するのだ。懶惰性のもものは、動かすに食へるから、よいことに思ふかも知れぬが、併し長続きしない。必ずや無爲苦を訴へ出るに相違ない。懲役は、規律ある活動生活である。だから彼等は、揃ひも揃つて健康體となつて出獄する。これと違つて無動監禁は、活動禁止であり、

生命を削奪する一種の死刑である。死にまさる苦痛でなければならぬ。人間に労働慾を満たす程度の労働は、絶対必要である。

私は、テクノクラシーに反対するものでない。また、反対する程に、テクノクラシーを研究してもゐない。唯一二時間の労働で、人間の労働慾が満たされない、といふ所に、反対の意志を表明するだけである。

労働過多はよくない。労働過少はもつと悪い。それなら、どれ位の所が、過不足のない所か。疲労するまで働き、そして疲労を堆積させない程度の所である。私共の體驗によれば、定業労働六時間、これに雑用労働二時間を加へた八時間労働——晝夜三分制が、丁度そこに當嵌まると思ふ。この程度の労働なら、人間の労働慾は充分に満たされる。また疲労は週休、月休、年休によつて完全に除かれる。

一五 罷業

罷業の意義

同盟罷業又は單に罷業と云ふは、英語の所謂ストライキを譯したものであらう。

ウェブスター字典によれば、ストライキとは或ものを強要し、或は雇傭主をして或條件に服従せしめんとする目的の下に同盟して罷業することある。此定義によれば、罷業を構成するには、少くも二人以上を要し、そして其目的は、経済的要求や労働條件の改廢にあるやうだ。この定義は、當時にあつては完全に罷業の意義を表示したものであらう。併し従來の罷業範圍は著しく擴大せられ、経済、労働に關する要求は無論、政治、教育方面にまで波及しつつある。選挙權擴張や戦争防止のための同盟罷業、或は學生が教授や舎監の排斥又は擁護のために、同盟休校するが如きがそれである。

近代罷業の起りは、経済的要求、労働條件の改廢にあつたかも知れぬ。併し時勢の推移につれて、罷業の内容も變つて來る筈だ。従つて罷業の定義も其都度、改修されなければならぬ。そこで私は、現時の罷業を左の如く定義したのである。即ち、労働中(廣義に於ける一般的労働)異感の起りたる時、或は労働、政治、経済その他の主張にして容認せられざる時、また或は同

情後授の意味に於て一時労働を停止すること、と。

この定義に従ふときは、雇傭間は勿論、政治的、國際的、同情的諸問題のための罷業、同盟休校、奸商に對する同盟非賣買、背徳者に對する同盟絶交等一切の罷業的行動を包含するだけでなく、一人罷業をも含むことになるから、現代的罷業の定義として、完全でなくともそれに近いものであらう。

一人罷業とは獨自罷業のことだ。例へば、一人でも雇傭主に對して罷業することが出来る、必ずしも多數を要しない。また、自分の仕事を働きつつある時、何か疑問の突發することがあらう。この場合何人も、一時働きを中止するだらう。これも一人罷業、獨自罷業である。牽強附會のやうだが、一人でも罷業の出来るは事實だ。そこで罷業を分ちて獨自罷業、同盟罷業の二つとすれば、罷業の意義が、一層明瞭となるであらう。而して普通罷業と呼ばれるものは、二人以上の同盟罷業を指すのである。

如上の如く罷業を解釋すれば、罷業は人間の發生と共にあつた筈だ。而して罷業せざるを得ざる時に罷業するは、その獨自的たると同盟的たるを問はず、何等差支ない筈だ。だが差支なし

として、罷業を亂用するは罪惡だ。亂用的罷業は、罷業でなく亂行暴動である。

罷業の推移

罷業は、人類の發生と共にあつたものとするれば、古來、隨時隨所に發生したに違ひない。にも拘らず、罷業の事蹟が傳つてない。あつたかも知らないが、筆者の寡聞なる之を知らない。惟ふに絶無といふのでなく、事件が特筆する程大ならず、且それ程重要性を持つものと、當時の人に考へられなかつたので、残されなかつたのであらう。例へば領主や地主に對する貢租不拂同盟、雇傭主に對する不平から、病氣などに藉口して働かさざりしが如きは、紛れのない政治的、經濟的、労働的罷業である。また、よく調べたら昔屢あつた日本に於ける百姓一揆の中には、罷業性的のものも少くなかつたであらう。けれども不埒なる行動、暴動、百姓一揆の名の下に強壓され、葬り去られたのであらう。

併し普通に罷業は、産業革命以來資本主義の勃興に依つて、誘發されたかの如くに考へられてるやうだが、現代的罷業は、それに違ひないであらう。併し罷業の素因は、人と共にあり、そし

て隨時、隨所に出沒起伏しつつ斷續し來たのである。但し資本主義の發達につれ、罷業の頻發を來たし、罷業の輪廓も次第に鮮明を加へ、方法も亦堅實性と巧妙味を増すに至つたことは事實である。

獨自罷業は、昔も今も將た將來も、別に大した變化はなからう。また、變化を見る性質のものでもない。が、同盟罷業は即ち然らず、將來如何に成り行くか、之を推想するも、まんざら無益ではあるまい。

刑法の極致は無刑にあるが如く、罷業の極致は無罷業でなければならぬ。併し無刑時代の來るか何うかの疑問である如く、無罷業時代の來否も疑問だが、少くも無大罷業時代の來るは、信じてよいと思ふ。また、さうなくてはならないのである。右に就き云へたいことは澤山あるが、本小冊子の能くする所でないから、それは省略する。

小供に剃刀

日本人に罷業は、小供に剃刀も同様だと云ふ人もある。日本人に狂暴性があると考へるからで

あらう。飛んでもない考違ひだ。

成程日本に暗殺が多い。何人斬といふことも日本の名物だ。これは狂暴性なくしては出來ないことだ。この好ましからぬ性癖は、馬來人の血の混入してゐるためであらう。

併しそれは一小部分で、總體的に觀察して日本人ほど、強い隱忍自重性を持つてゐるものは少い。一寸見れば日本人は極端に走りさうだ、が走らない、徹底しさうだ、が徹底しない。換言すれば我民族性は、穩健の一語に盡きる。

歐米人種は、頭腦は明晰だが、強烈な極端性と徹底性をもつてゐる。極端性とは、極端から極端へ走ることであり、徹底性とは細を穿ち微を究めなければ已まないことだ。極端性中に、狂暴性の雜入してゐることは云ふまでもない。この性癖あるが故に、歐米人が波瀾起伏に富み發明發見も亦多い所以である。

最近の例を示せば、獨逸が軍國機構を最高度に築造したかと思へば、國命を賭してのレーニンの共産主義が現はれた。さうかと思へば、ムツソリーのフアショと來た。極端から極端だ。狂暴性なくしては出來ないことだ。猫額大のギリシヤ半島に、氷炭相異なるスパルタとアテネの對

時以來歐洲は、すべて此の調子を續けて來てゐる。だから彼等は縦線的で、進むか退くか、登るか降るかである。ギリシヤ文明、羅馬文化の高峰に攀登つたかと思へば、急轉直下、中世の暗黒時代に墮落した。と思へば、今日の科學文化を造上げ、しかもどこまで進展するか、見當がつかないと云ふ有様だ。このやうに歐米人は、極端に上下し、極端に徹底しなければ已まない性癖である。少くも我等蒙古人種よりは、さういふ傾向が強い。罷業に就き、小供に剃刀の危険は、寧ろ日本人よりも歐米人に多い。

歐米人の性格が縦線的なら、日本人は横線的で、上下するよりも左右する方である。だから白人のやうに、極端な進歩もしない代り、極端な退歩もせず、左右動を爲しつつ、遅いが堅實に向上を續けてゐるのだ。論より證據、我が二千六百年の歴史を見よ。どこに極端的事蹟があるか。あるとしても他種族のそれに較べたら、お話にならないのである。

二三の實例を挙げよう。その一は明治維新の藩籍奉還である。穩健忠誠の日本人だから圓滑に運んだものの、歐米であつたら、餘程血を見なければ出來ないことだ。次ぎは明治の初期、蠻勇自慢の我が政治家達が、よくもあの、傍若無人なる外人の侮蔑と横暴とに堪へて、隱忍自重、遂

に新日本の基礎を据へたことだ。馬來性的日本人は、追隨外交として攻撃したが、なんぞ知らん日本發展の要諦は茲にあつたのだ。歐米の識者が、日本人の隱忍深きに驚入るのも無理はない。もしも當時、所謂強硬外交を振り廻はしたら、日本は今頃どうなつたか、分つたものでない。

明治二十年前後、自由平等主義が流行つたものだ。當時の危険思想である。暗殺、暴動の不祥事が續出し、人をして何うなることかと憂慮せしめたものだ。然るに當時の壯士——最も危険な思想家は、どうなつたか。申合せた様に今日、極端な保守的思想家として、政、財界に残存してゐる。

更に現在の例を示さう。共產主義者といへば資本側は勿論、無産者までも恐れてゐるが、その心底を忖度すれば、共產思想そのものよりも、より以上、主義者の狂暴性に怯えてるやうだ。それなら心配無用だ。見給へ一投獄で共產巨頭連は、轉向また轉向だ。減刑を僥倖する、さもし根性があるかも知れないが、何といつても極端に走れない穩健な民族性の致す所でなければならぬ。宗教に於ても日本人は、極端性——迷信性が少い。神佛混合である。追々は神佛基回混合となるかも知れない。歐米人の性格だつたら、三日主義者にはなれない。

日本人は大膽だが狂暴ではない。性質上なれないのである。移り易いが極端に走らない。性質上走れないのである。日本人は輕佻のやうだが、案外沈着で常識的である。私は此民族性より推して、日本に於ける罷業の將來は、穩健の一路を辿るものと確信する。危ないのは日本でなく、却つて本家の歐米であると思ふ。

一六 労働教育

労働教育とは何か

労働は萬事の母である。労働なくして何ものもなし。

よく働くものに低脳者なく、非常識者なく、又貧乏人はない。あつても少い。従つて不忠、不孝、不信なるものもない。あつても少い。

然るに古來、西も東も期せずして忠孝、敬神の教育には、共に多大の努力をなし來つたが、労働教育は殆んど忘れられた形であつたのは、不思議でならない。尤も労働教育と見るべきものは、断片的にはあつた。例へば勤勉を奨め怠惰を戒め、ごま化しを斥け正直を擧げ、或は縁ぐに

追付く貧乏なしとか、恒産なきもの恒心なしとか、天は自から助くるものを助くとか、いづれも労働教育である。さうかと思ふと、労働尊卑觀は、依然として認められ、筋肉及び中間労働は、士君子の近くべきでないと言された。それ程でなくも、さういふ傾向は充分にあつた。これでは、いくら勤勉を説法しても、労働教育とならない計りでなく、反對に非労働教育を結果することになつたのである。

然らば労働教育とは、如何なるものかといへば労働原理、労働道德、労働方法換言すれば労働とは何か、如何に労働に對すべきか、如何に労働すべきか、この三大綱目に就いて教育することである。労働原理に徹底すれば、労働に上下の差別なく、一樣に神聖なることが自ら了解される。

小學教育は、大衆の受くる教育の、初めにして又終りである。これは、どこの國でも同じことだ。しかし彼等は、小學教育を修了すると直ちに、何かの働きに就くものである。とすれば労働教育は、就働前、世に出る前、小學時代に於て施さねばならぬ。云ふまでもなく労働教育は、小學時代と限らない。それは徳育が高級學校、寺院、教會其他あらゆる機會に於て、繰返し教へられるやうに、労働教育も亦人の一生を通じて、あらゆる機會に於て、教はれもし教へもす

三大綱目

べきものである。

小學校に於ての労働教育は、簡易を旨とし、兒童の負擔を重くしない範圍に於て、労働の三大綱目に就き、兒童の日夕見聞する事實に照らして、飲み込み易い様教へねばならぬ。例へば、人は食はなければ生きて行けない。そして其食物は天から降るものでも、地から涌くものでもなく、百姓が田畝を耕耘して米麥ならば刈る、乾かす、穀をとる、搗く、炊ぐ等種々雑多なる労働課程を経て、初て食膳に上るやうなもので、一切萬事労働なしに出来るものはない。故に労働は絕對必要であり、從つて尊重すべきものである、といふ具合に啓發するのである。

更に一步を進めて、労働に類別はあるが、いづれも神聖にして、上下尊卑の差別はない。仕事は役所、臺所、商賣屋、農事、大工、土工と變るが、働きそのものは一樣に神聖であることを、分り易く、面白く教示するのである。説明方法其宜しきを得れば、兒童の興味心を唆り、兒童をしてこれらの根本義を逸早く容易に、理解せしめるであらう。

更に労働道德、労働方法の教育に就いて云ふならば、餘所見或は談笑し乍ら——労働侮蔑的態度で働く、一心不亂——敬虔的態度で働く、その何れが本當で、能率的であるかと質問する

ならば、四五學年以上の生徒なら、教へずも其識別に迷はないであらう。

また労働時間と休養時間とは、嚴重に區別さるべきもので、労働時間は労働すべき時間だから、一意専心労働し、休養時間は休養すべき時間だから、只管之を休養に正用すること。而して雑談、放歌、喫茶、喫煙等は休養範圍のもので、苟且にも労働中に爲してならぬこと等を、理論と實際の兩方面から、興味本位に分り易く教へるのである。

人の一生は、多く幼年時代に受けた印象によつて支配される。少くも十中八九は、その支配から免れない。人は年を取る程時代後れとなる。それは其人の性質や境遇にもよることだが、幼年時代に受けた印象は、執拗にも其人を拘束して、時代と推移するを許さないことが、有力なる原因の一である。されば幼年時代に労働教育を施すならば、それが容易に拭ひ去ることの出来ない印象となり、やがては血となり肉となりて、その人の一生を支配するであらう。斯くして正常労働者即ち正常人が出来上るのである。

小學校に、新たに労働科を設けるにしても、前述の如き方法で教育するならば、爲に兒童の負擔を重くしないだらう。假りに負擔が加重するものとすれば、他の科目を除いても、労働教育

は是非加へねばならぬ。労働科といつても、別に獨立せしめずともよい。修身科中に加へて結構である。

労働者の歐米見學

成年労働教育の一として、是非やつて貰ひたいことは、各府縣より幾名かの男女労働者を、毎年海外特に歐米諸國へ見學に派遣することである。そして派遣すべき労働者は、これを工場労働者に限定せず、百姓、大工、店員、巡査、役場吏員、郵便局員、會社員、運轉手、車掌、主婦、女中等各方面に亘らねばならぬ。

問題は費用だが、これは府縣持ちを原則とし、加ふるに資産家の寄附を仰ぐことにしたい。猶不足のときは、國家に於て補助すべきである。そして大工場、大商店からの従業員見學費は、その工場、商店に於て負擔するを原則とし、已むを得ない時は、國家より多少補助することにしたらしいと思ふ。府縣の身代で、毎年兩三名位の労働見學費の出ない筈なく、それに多少の寄附、補助ありとすれば尙更である。

また、大工場、大商店にしても、一二名位の労働見學者を派遣したとて、それが大なる負擔となるとは考へられない。どこからでも捻出される筈である。或程度の犠牲を拂つたとしても、結果からいへば、得る所失ふ所を償つて尙餘りあるは確かである。

船室は二等大部分は三等で結構だ。そして簡易旅館に宿泊し、簡易食堂で食事することにすれば、此等の費用は少額で済む。米國邊の木賃宿、十錢飯屋は、日本の中所の旅館、食堂よりも上等だ。利用して決して日本労働者の名譽を汚さない。

昭和九年七八月の頃、瑞西國ルサン市ローヤルホテルの青年重役が、遙々來朝、帝國ホテルで給仕として働いた。見學である。これだ、これでなくては、いけないのだ。大ホテルの經營者の一人が、給仕となつて見學する所に、言ふべからざる妙味の充溢するを覺へる。

云ふまでもなく、我労働見學者をして、一片の觀光客に終らしては駄目だ。向ふの労働振りを十分に視察、會得せしめねばならない。それには向ふの了解の下に、實地に働かして貰ふことだ。特に獨逸人や米國人の労働振りに注意することだ。獨逸人は最も科學的に働くといはれるからだ。斯くして向ふの労働者が、如何に労働を考へ、如何に労働に對し、如何に労働するかが、

實地に會得される。善惡共に他山の石として、我労働界を裨益するや大なるものがあらう。少くも費用に値ひする丈けの、おみやげは必ず持ち歸る。

歐米の文明國のみでなく、亞細亞、南米、アフリカ方面を視察せしむることも亦必要である。此等地方の労働状態を視察し、之を歐米及び我國のそれに對照すれば、國の異なるに従ひ、労働者の品位と労働振りに、^一格差の等差あり、而して一國の文化は、この等差に準じてゐることが、恰も手に取る如く看取せられるであらう。この重大な一角を發見しただけでも、見學費用の如きは、十二分に償はれるのである。

見學者は必ず所屬の府縣、または會社、商店、組合等に口頭或は文書を以つて報告せねばならぬ。而して此等の報告は、必ず新聞、講演等を通じて全國に宣傳せらるべきは云ふまでもない。而して其度び毎に、我が労働界を刺戟し、相應の改善を促す動機となるや必せりである。

我政府及び大會社は、年々莫大な費用を投じて、視察員、見學員なるものを歐米に派遣して、その員數の夥多なる驚くの外ないのである。歐米巡禮員の關所と云ふべき紐育か倫敦に於て御覽なさい。我が視察員、調査員、遊學生、見學者は、櫛の齒を挽くやうに、年中絶え間なく往

來してゐる。大した費用と思ふ。此方は、それでよからうが氣の毒なのは向ふだ。といふは、一刻千金の時間を割いて、丁寧^{ていねい}に案内し、精細に説明した上、秘密を盗まれる懼れがあるからだ。此點に就き、磊落、^{らいらく}應揚なる米國人は平氣だが、老境に入つた歐洲と來ると、びく／＼してゐるやうである。

戲談^{じやうだん}とは思ふが向ふの新聞で我視察員を窃盜委員と揶揄した記事を見て、あつと思つたことがある。過去は致方なしとしても、大國と自稱する手前、模倣も度を超えては、面目問題だと心ひそかに耻ぢざるを得なかつた。併し實際問題として、歐米への視察員、遊學生派遣は、如何に感張つてみても今までは勿論今後も或期間は已むを得ないであらう。歐米視察が知識労働界に必要なりとすれば、筋肉、中間労働界に於ても亦同様でないとは云はれない筈だ。頭が冴えても、手足がよく動かなければ、何にもならないからだ。日本の巻煙草に御丁寧にも、マツチ、金屑など混入されることが珍らしくない。外國では斯んな悪戯は絶対にない。これは專賣局の頭腦は冴えてゐても、手足がよく動かない所から來るのである。ここが女中、人夫からまでも海外見學生を派遣せよ、と主張せざるを得ない所である。

筋肉労働者歐米見學説必ずしも不可でないが、女中見學は行過ぎとして一笑に附し去る人もあらうが、どうして臺所行政は實に大切なもので、一家の經濟は申すまでもなく、國民の健康、道徳延いて國家の隆替と、少からぬ關係を持つものである。如何に主婦が偉くも、女中が間拔けでは、臺所行政は甘く行かない、また女中の爲でもない。歐米の女中に較べれば、日本の女中は全くなつてない。實をいへば女中計りでない、主婦も同断だ。日本の主婦に、家政の出来る人が、果して幾人あるだらうか。家政科を出た人も少なくはあるまい。併し痒い所に手の届く程行渡つてゐる婦人は少いやうだ。見給へ日本の家庭を。女中は使つてゐるが、大切な所に手落ちが多い。小綺麗にやるが清潔を知らない。手足も動かないが、頭も冴えず、といった有様だ。日本の主婦が、もう少し労働の何たるかを知つてゐるならば、單に家庭經濟だけで、年數億圓の無駄を省くことが出来よう。少くも一世帯平均年十圓の節約は出来るだらう。即ち全國一千二百萬世帯とすれば一億二千萬の巨額となるのである。この意味で、主婦の歐米見學は、女中のそれと相俟つて、甚だ重要なことである。

公平に彼我労働界を比較してみれば、今尙彼に教ふるよりも、彼に學ぶことが多い。とした所

で、女中労働までも彼に見習はねばならぬ、とあつては、これこそ國家の面目上忍びない、と云ふ人もあらう。最もではあるがそれは頭かくして尻尾かくさすと云ふ奴だ。見給へ日本文化の中心といはれる東京の丸の内界限を。何所に日本がありますか。一切萬事歐米直譯で、丸で英米の殖民都市のやうだ。舊時のままなるは、人間の顔ばかりだ。これと云ふも、殆んど總ての事に於て、まだく向ふが優つてゐるからである。

下手な精我慢は見つともない。よいことは、どしどし輸入するがよい。況んや大切な労働上のことだ。どんな小さい事でも躊躇せず採用すべきだ。百聞は一聞に若かずで、實地の見學は書物に見ることの出来ない、呼吸といつたやうなものまで攫むことが出来る。是非筋肉乃至中間労働者をして、海外見學に出したいものである。

労働力と體力

羅馬の諺に、健全なる精神は、健全なる身體に宿るとあるが、これに反對するものは恐ろしくないであらう。それは眞理であり、實際であるからだ。健全なる身體とは、過小過大ならず、均

齊の取れた健康體と云ふことである。一生日本に蟄居して居る人には、さういふ感じも起るまいが、外遊して初めて我々大和民族が、瓜哇人、比律賓人同様、侏儒に近い短小民族であることが、明らかに認識されて、何となく嫌やになるのである。身體の過小と言ふことは、退化、未發達乃至病的を意味する。健全なる身體ではない。されば我々大和民族の身體には、健全なる精神——勞働力の宿られない筈、宿つてもそれは、一夜の雨凌ぎで、早々出て行く筈である。

小なる褐色人とは、米人の附與した日本人の綽名だ。この言葉には、驚嘆、敬畏の意味は、どう考へてもないと思ふが、しかし憎惡の念はないが可憐、劣化或は未發達の意味は、言外に溢れてゐる。といつても我々は、怒るわけには行かない、我々の身體が髓に劣化してゐるからだ。

といつたら、それは屁理屈と云ふもので、實際と相去る遠い、現に短小な我々が、僅々六七十年間に日本といふ大國家を造り上げたではないか、身體の弱小は劣等を意味しないと。同感である。併し冷靜に熟考せねばならぬ、といふは、日本人は黃種中、ウラル、アルタイ族に屬するといはれる。即ちツラン民族の一員である。語系、精神狀態、地理的關係から見ても、それに違ひなさうである。

ウラル、アルタイ民族は、偉い民族だ。古來屢々歐亞二大陸を席卷したのはこの民族である。ハン族、トルコ族、蒙古族で、いづれも匈奴族である。併し彼等は揃いも揃つて、勝つたかと思ふと、はや既に民族的全滅を急いでゐる。ハン人、トルコ人、蒙古人今何處に何うしてゐるのか。一人残らず被征服種族の血液の中に、消え失せてゐないか。今の彼等は、白人であつて黃人ではない。勝つて負けたのだ。勝つても負けては何にもならぬ、劣敗する位なら寧ろ勝たない方がよかつたのだ。匈奴諸族の發展は、線香花火的發展である。眞の發展とは、勝つて負けるのではなく、負けても最後の勝ちを攫むでなければならぬ。そこで問題は、歐亞二大陸を征服し、到る所に黃人國家を建設した、この偉大なる民族が何故に、かくも脆く消え失せたかと云へば、原因は一二にして足らないが、身體が小弱だつたが爲に、被征服民との混血戰に劣敗したと云ふことが主たる原因でなければならぬ。またそれだけ能力の不足を意味する。この事に就き、精細述べたいのであるが、紙數が許さないから、これは差し控える。

我等日本人は、種族的に匈奴民族と兄弟である。が併し身體は、彼等よりも小さい。小さいが我々は、既に驚異的大發展を爲した。今後も益々發展するであらう。しかしウラル、アルタイ民

族共通の質氣樓的發展に終りはしないかを恐れるものである。何となれば日本人は、他のウラル、アルタイ民族同様、混血戦に優勝する素質を缺いてゐる。それは、身體の餘りに短小脆弱なるためだ。給へ日本人と白人の混血兒を、一代にして殆んど白人化されるではないか。斯んな脆弱な身體を以つて、眞の民族的大發展の出來やう筈がない。その癖日本人は、混血を好む、わざと自滅するやうなものである。

日本人の短小なるは、先天的のものでなく退化したのである。それは緩漫ではあるが、明治以來日本人の身長伸びつつあるに見ても分ることだ。然らば、どうしたら、より急速に民族の強大化が出来るかと云へば、従來の非活動的生活を捨て、労働的——活動的生活に改めることだ。見給へ我が男女學生の身長が、目立つて伸長しつつあるを。これは學校生活、私の所謂労働的生活をなしつつあるからだ。即ち労働服(洋服)を着、労働履を穿き、足坐の代りに起立或は椅子に凭り、肉を食ひ、運動をなすからだ。手足に絡みつく衣服を着、廻板同様の下駄を穿き、膝を折つて坐り、菜葉を常食としてゐるのでは、身體の退化するは當然だ。

更に驚くべきは、米國生れの日本人、所謂二世世である。吉田、石原兩博士の調査によれば、

内地壯丁の平均身長約一六〇糎なるに、布哇生れの日本人は一六五糎、米國生れの日本人は一六九、六糎即ち五尺五寸九分平均で、米人に比べても左程見劣りしないとある。内地の兄弟に比べると、丸で別人種のやうだ。どうして米國生れの日本人が、たつた一代で斯くも優化したのかと云ふに、身體の發達に極めて合理的な社會、換言すれば活動的風習の國に生れたからだ。

所で問題となるのは、何故に布哇生れの日本人が、米本國生れの日本人に比して少し劣るかと云ふ事だが、私の考へでは布哇在住の日本人は、米本土在住の日本人よりも、より多くの日本人の風習——身體の發達を妨害する悪風習を保つてゐるからであらう。その證據には、内地そのままの生活をなしてゐる滿洲生れの日本人は、肉體的に何等の進境を示さないからである。

かくの如く、ちよとした生活の變改によつて、身長と健康とに、全く驚くべき變化を見るのである。これで日本人の短小なるは、決して先天的のものでなく、足坐、キモノ、下駄、極端なる菜食と云ふ、身體の發達を阻止する、非合理的な生活より來たものであることが明らかであらう。従つて身體の長大健全化を欲するならば、従來の非衛生的生活を捨てて、活動的生活に移らねばならぬ。身長を伸長を欲するならば、運動を勵むに限ると信じきつてゐる人が少いが、運動結構

である。併し活動的風習を採用すれば、運動自から其中にあり、特に運動を勵ますも身長伸び、且健康となる。

肉體劣化して能力のみ劣化しない道理がない。でないと假定しても、劣化した身體を以つてしては、その優秀なる腦力を、思ふ存分活用することが出来ない。身體の優化は、孰れの點より考へても、絶對必要である。

日本人最近の發展は、ウラル、アルタイ系發展か何うかは、時の経過に待つ外ないとしても、小さい身體を有つ民族として、危な氣を感じざるを得ない。杞憂だつたら結構だが、いづれにしても肉體の偉大化、健全化は益あつて損のないことだ。

労働の三大原理が、よく飲み込めたとしても、それを充分に行へ得ないやうな並外れの小さい肉體では困る。體育は、労働教育の第一義に置かれねばならない。

一七 結 論

労働主義は絶對である。労働主義に對立する主義はない。ありとすれば非労働主義だが、まさか、そんな主義のあられよう道理がない。

他の諸主義は即ち然らず、必らず反對の主義が對立してゐる。例へば資本主義に對する社會主義、家族主義に對する個人主義、國家主義對世界主義、專制對自由、有神對無神と云つたやうなものだ。だから労働主義以外の主義には常に闘争、波瀾絶えず、起つたかと思へば仆れ、引込んだかと思ふと又現はれる、と云つた鹽梅式で、労働主義以外の主義は、流行性的または、一時性的のものである。労働主義は即ち然らず、増減なく、盛衰なく、永久を貫く眞理である。

労働主義の向ふ所に行詰りはない。行詰るは労働主義を捨てるか、又は充分に働かないからである。東洋種族特に日本人は、地域的に行詰つてゐる。子孫を容れる餘地がない。このままで行けば、民族的窒息死を覺悟せねばならぬ。然らざれば産兒禁制を行はねばならない。如何程工業を盛んにした所で、一坪の地面に五人十人は棲めない。衣食は豊富でも、かかる密集生活では、結局民族的墮落は免れない。日本人は慥に地域的に行詰つてゐる。我等は爲政者を難詰する前に、思ひを此所に致さねばならぬ。

しかし心配は無用だ。未知の土地は、必ず世界の何處かに横つてゐる。而してその所在は、神が宇宙の間に暗書し置く筈だ。我々はその神書を發見すればよいのである。然らば何うすれば發見することが出来るか。曰く、労働力中特に發見力と獨創力とを發揮するのである。

たれかの歌に、氣に病むな、金は世間に預け置く、これを欲しくば働いてとれ、とあるが、金に限つたことはない。土地でも何でも労働主義に忠實ならば必らずもらへるのである。世界は世界の世界である。領土なきを憂へず、働かざるを憂ふべし。労働の前行詰なし、労働主義なるかな。(完)

昭和十年十月二十五日印刷
昭和十年十月三十日發行

筋肉労働三十年
定價參拾錢

著作
所權
有作

著作者 安倍貞松
發行者 東京市荏原區戶越町一、一九四番地 中澤辨次郎
印刷者 東京市神田區美土代町二十二番地 横山重喜

發行所 觀流社
東京市荏原區戶越町一九四番地 振替東京六三九〇七番

發賣元 株式會社 巖松堂書店
東京市神田區神保町二丁目二番地

電話九段(四一三五番・四一三八番)
振替東京六五五番



